ACRYLART

アクリラート別冊2012



The Scholar 20 Perspective

The Scholar 20 Perspective

アクリラート別冊２０１２

holbein

ごあいさつ

新しい素材は、新しい表現をもたらします。それが普及し、その素材ならではの作品が増えると、ひとつの新しいジャンルとして認識されるようになります。かつて油彩画の技法が確立されるまで、顔料と媒材を混合するという意味の「テンペラ」は、「絵具」と同義語でした。油彩の普及によって、区別するためにそれまでの水を使った絵具が特にテンペラと呼ばれるようになったのです。深い色調と透明感、美しい光沢や伸びの良さによって、この革命的な素材、油絵具は瞬く間に西洋絵画の主流となりました。そして科学の時代20世紀には新たな革命とも言えるアクリル絵具が発明されます。その後、アクリル絵具だけでも多くのバリエーションが生まれ、また、数百年変わらないと思える油絵具でさえ、技術革新と新時代の顔料によって、さらなる進化を遂げています。

かつてないほどさまざまな素材を選択できる現代は、作家にとって非常に恵まれた時代と言えるでしょう。同時に、自分の求める表現に最も合った素材を見つけ出さねばならないという選択の課題も背負うこととなりました。表現の探求と素材や技法の探求とは、切り離しては語れない関係にあるのです。

さて、第25回スカラシップ奨学者20名の作品集ができました。

長い美術史の最前線を担うべき現代の若者たちが、果たしてどんな素材をどのように使い、どのような表現を試みようとしているのか。そんな視点でこの冊子をごらんになるのも興味深いのではないかと思います。

2012年7月

ホルベイン工業株式会社

スカラシップ実行委員会

The Scholar Perspective 20

Contents

第25回奨学者（五十音順）

厚地朋子 ATSUCHI Tomoko 12 · 34

伊藤遠平 ITOH Empei 13 · 37

江川純太 EGAWA Junta 14 · 40

小川直樹 OGAWA Naoki 15 · 43

鹿野震一郎 KANO Shin'ichiro 16 · 46

北本真隆 KITAMOTO Masataka 17 · 49

きむらかおり KIMURA Kaori 18 · 52

久後育大 KUGO Ikuhiro 19 · 55

佐藤理恵 SATOH Rie 20 · 58

sokami 21 · 61

髙岡美岐 TAKAOKA Miki 22 · 64

高田理美 TAKADA Satomi 23 · 67

戸谷　森 TOYA Shigeru 24 · 70

土井奈々恵 DOI Nanae 25 · 73

永山真策 NAGAYAMA Shinsaku 26 · 76

箱嶋泰美 HAKOSHIMA Yasumi 27 · 79

古畑智気 FURUHATA Tomoki 28 · 82

松川朋奈 MATSUKAWA Tomona 29 · 85

宮崎雄樹 MIYAZAKI Yuki 30 · 88

本村　誠 MOTOMURA Makoto 31 · 91

The Scholar Perspective 20

Works

第25回奨学者の作品



厚地朋子

David

パネル、麻布、油彩

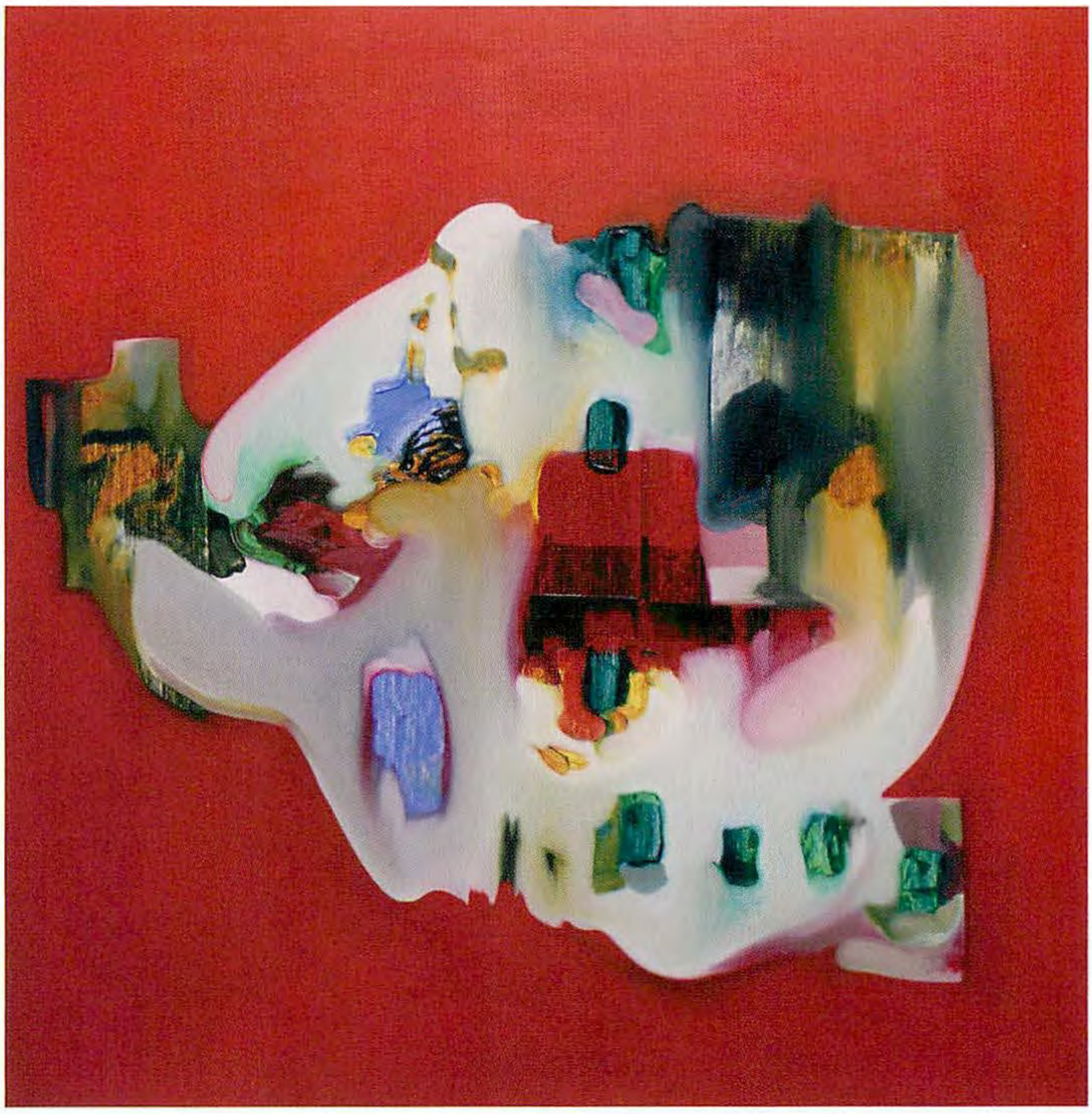
62.0×64.5㎝

2012年



伊藤遠平

銀色に光る森の人の呼吸するイメージ
キャンバス、油彩
145.5×72.8㎝
2011年



江川純太

今そこに見た、遙か遠く。

キャンバス、油彩

91.0×91.0㎝

2012年



小川直樹

センチメンタル・ノルディック
キャンバス、油彩
33.6×33.6㎝
2011年
photo credit:Ⓒ Oギャラリーeyes



鹿野震一郎

guidance
キャンバス、油彩
91.0×116.7㎝
2010年



北本真隆

Catena

キャンバス、油彩

72.7.×91.0㎝

2011年



きむらかおり

よいみずいろ
キャンバス、油彩
91.0×116.7㎝
2012年



久後育大

Trace-71
木版（土佐和紙、顔料）
91.0×91.0cm
2011年



佐藤理恵

ピクニック（クラナッハ「エジプト逃避途上の休息」より）
パネル、綿布、アクリル
145.5×112.0㎝
2011年



sokami

Untitled
キャンバス、油彩
80.3×65.2㎝
2011年



髙岡美岐

09.7/16.19:06 09

キャンバス、油彩

91.0×116.6㎝

2011年



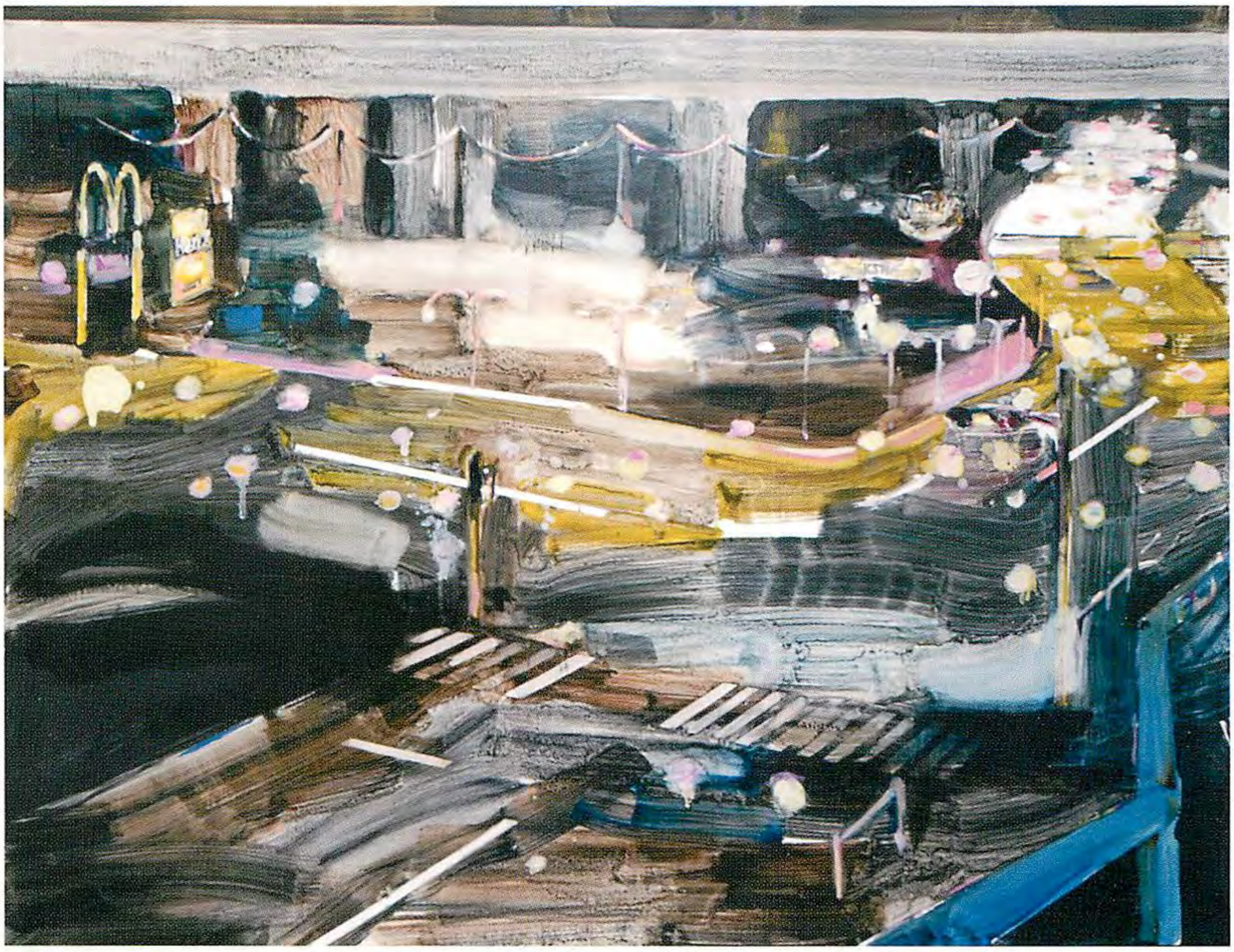
高田理美

源と跡4
綿布、アクリル、油彩
181.8×227.3㎝
2010年



戸谷　森

3 AM 2 tree
キャンバス、油彩
194.0×259.0cm
2011年
photo by 上野則宏



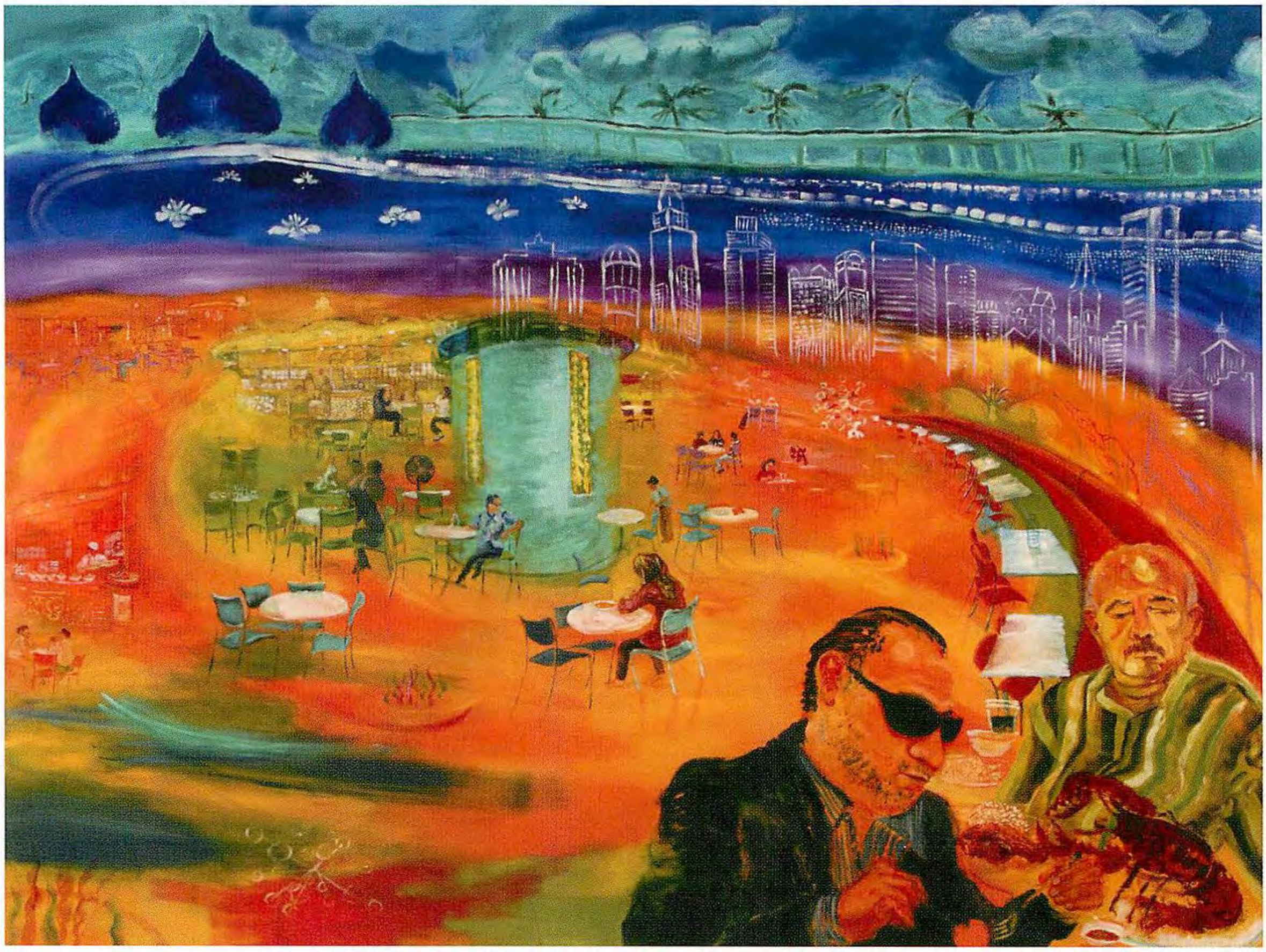
土井奈々恵

night drive
キャンバス、油彩
112.0×145.0㎝
2010年



永山真策

Amy 1
キャンバス、油彩
162.0×130.0㎝
2012年



箱嶋泰美

テイスト オブ アジア／Taste of Asia
キャンバス、油彩
194.0×259.0㎝
2011年
photo by 小椋安幸



古畑智気

Melting point
パネル、綿布、アクリル
45.5×45.5cm
2012年



松川朋奈

The dress
キャンバス、油彩
100.0×72.7㎝
2011年



宮崎雄樹

ハイ・スクリーム

キャンバス、アクリル、蜜蝋、油彩

130.3×162.0㎝

2011年



本村　誠

絵画をめぐって
キャンバス［油地］、油彩、金箔を施した木製フレーム（中央：3点）
綿布、油彩（右下：1点）
金箔を施した木製フレーム（左上：2点）
121.6×155.3㎝（組み作品・展示サイズ）
2009～2012年

The Scholar 20 Perspective

Report

第25回奨学者のレポート

厚地朋子

ATSUCHI Tomoko

私とダヴィデ

一、いつも乗っていたバスから見える風景

40分ほどバスに乗っているので、その間は何をするわけでもなくただぼーっと窓の外を眺めている。京都は盆地なので、見える風景の一番遠いところには必ず山がある。その先は何があるのだろう、と気になってみたので、一番遠いところにある山を凝視してみた。すると、山と私の間にある諸々の距離が狂い始めた。山も建物も歩く人も私の手も、本来見えるサイズを変えて自由に大きくなったり小さくなったりした。

この経験は子供の頃、よくあったことを思い出した。ピアノを弾いているときのこと。決して上手くなかった私は、ピアノを弾くときは鍵盤にのった手を凝視して弾いていた。すると手が異常に大きく見えてくる。その状態のまま傍らにいる先生の顔を見上げると、同じように先生の顔も異常に大きく、部屋の家具がミニチュアのように見えた。ある一点を凝視しているとよくこういうことが起こるので、その都度頭を振って視点を整えた。

私の目はとても曖昧で、遠くにあるものは小さく見える、とは必ずしもいえない。

二、私とダヴィデ

私が、かの有名なミケランジェロ作のダヴィデ像に初めて出会ったのは、国道沿いにある喫茶店の前に立つダヴィデだった。彼はとても大きかった。子供の頃は気になって気になってしかたがなかったが、巨大な全裸の彼を直視することも親に尋ねることも恥ずかしくて出来なかった。喫茶店がつぶれたと同時に彼は姿を消した。

どうしてダヴィデ像はあそこにあったのだろうか。西洋への憧れが、混乱と調和をもって存在する不思議の国、日本。

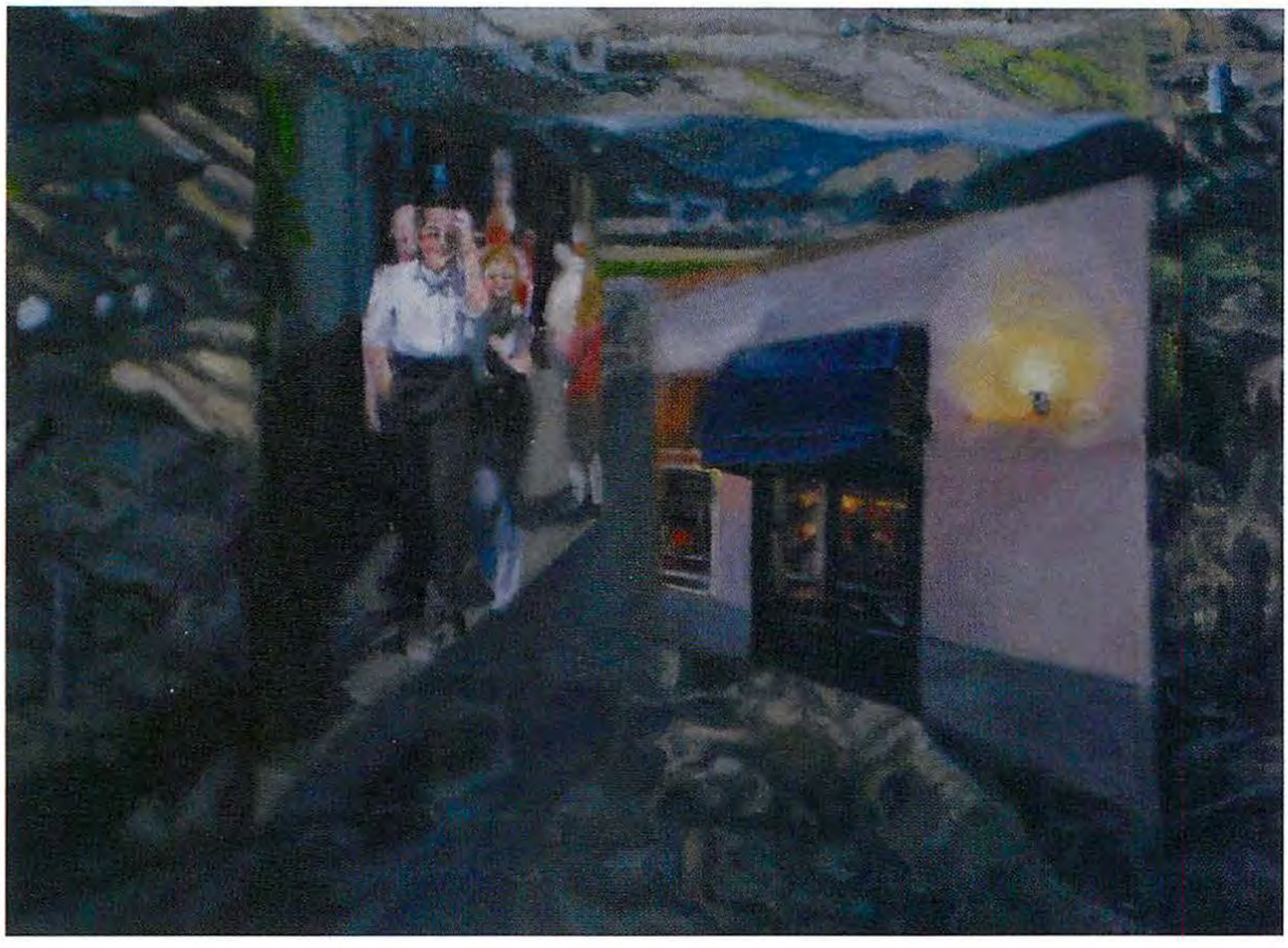
三、それは魔法のよう

私は絵を描くときも目の前の画面と描く対象を凝視する。全体ではなく部分を。部分の集まりが全体を構成する。絵の具は、私が描く対象をどのように部分に分解したのかを痕跡として残している。しかし、画面からはなれて絵を見てみると、痕跡としての絵の具が何かの像を描いていることに毎回驚く。私の意識は今描いている部分にしかないのに、部分と部分がつながり絵が出来上がっていくのは魔法のようでもある。

自分の作品を語るのに、未だに的確でストレートな文章表現ができないが、頭の中を整理しながら3つにまとめてみた。一、は視覚のこと。二、は異文化への憧れ、三、は絵の具のこと。どれも、今の作品＝私にとって大切なことだと思う。しかし本当に描きたい絵は何かもっと違うような気がする…何かもっと大きくてたくましい。そんな絵を求めて、おばあちゃんになっても絵を描いていたい。



ライナス
パネル、油彩
57.0×46.5cm
2011年



ホリデー・オブ・ライナス
パネル、綿布、油彩
35.0×49.0㎝
2010年



厚地朋子

1984年　京都府生まれ
2008年　京都市立芸術大学美術学部卒業
2010年　京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻修了

個展
2009年　TARO NASU／東京
2012年　taïmatz／東京（馬喰町）にて秋頃開催予定

グループ展他
2011年　DONATIONS!! チャリティー展　アトリエスペースGURA／京都
2010年　わくわくkyoto　旧立誠小学校／京都
絵画の庭－ゼロ年代日本の地平から－　国立国際美術館／大阪
2009年　一個人 only one　MOT/ARTS／台北［台湾］
わくわくJOBAN-KASHIWAプロジェクト　TSCA／千葉
no mane　ZAIM／神奈川、旧立誠小学校／京都
2008年　450　TARO NASU OSAKA／大阪
Opening Exhibition II　TARO NASU／東京
京都の五人　TARO NASU／東京

伊藤遠平

ITOH Empei

回帰現象

ひとつひとつの小さなエネルギーがそれぞれの関係性を保ちながらも、常に休むことなく連鎖し、やがて大きな生命体へと形成されていく森という存在は、すべてを包み込む母のようでもあり、昔から人々が抱いてきたような恐怖や信仰の対象など普遍的なものの象徴として捉えられてきました。そしてその構造はまるで人間社会をも連想させ、現代を生きる我々人間の本来あるべき姿を考えさせてくれるようにも思えます。私の絵画作品は薄く溶いた油絵具を何層にも重ねることで、次第に形が表れて来ます。日々森と対話し、そこで感じたイメージをじっくりと画面の中に見つけていくのです。目に見える物だけを追い求めるのでなく、様々な生命感を内包しながら、作品がまるでひとつの生き物のようにに機能し、動き始めること。このことを自身の重要なテーマとして位置づけています。

セラミックによる立体作品は森の中で拾い集めた枯れ葉や枯れ枝などを、水で液体状にした粘土（泥漿＝でいしょう）で混ぜ合わせ、自然物の持つ有機的なフォルムと泥漿の流動性を生かすことで新たな表情を見せ始めます。この制作方法は絵画同様、偶然性と自身のテーマとのせめぎ合いの中から生命感を抽出させるものであり、表れた形は見る視点によって様々なイメージを連想させます。そしてそれは同時に作品内部にも変化をもたらし、土に覆われた自然物は高温の窯に焼かれることで燃えて無くなり、その部分が空洞となることで、作品内部には複雑に入り組んだ表面からは想像もつかないような空間が生まれます。一度生を終えた自然物は土とひとつになりながら新たに再生を果たし、作品内部から自身の表現を、絵画・ドローイング・立体作品など、様々な角度から追求して行くことで、それぞれの関係性の中で作品はより複雑さを増し、見る側に豊かに働きかけるのではないかと考えています。そして展示空間自体がゆっくりと脈を打ちながらひとつの生き物のように動き始めることを私は心から期待するのです。



森の人 Ⅰ
キャンバス、油彩
194.0×324.0㎝
2010年



Ceramic Ⅳ（森の人）
粘土、枯れ葉、枯れ枝
31.5×34.0×28.0㎝
2011年
photo by 有賀 傑



展示風景（YUKARI ART CONTEMPORARY）
2011年
photo by 有賀 傑



伊藤遠平

1976年　茨城県生まれ
2000年　東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒業
2002年　東京藝術大学大学院美術研究科油画専攻修了

個展
2011年　YUKARI ART CONTEMPORARY／東京
2009年　YUKARI ART CONTEMPORARY／東京
2008年　YUKARI ART CONTEMPORARY／東京
2007年　村松画廊／東京

グループ展他
2011年　VOCA展2011　現代美術の展望-新しい平面の作家たち　上野の森美術館／東京
2010年　"ide'e fixe": Group Exhibition　Gallery EXIT／香港［中華人民共和国］
　　第29回損保ジャパン美術財団選抜奨励展　損保ジャパン東郷青児美術館／東京
2008年　魅惑の像　つくば美術館／茨城
2005年　われらの時代　水戸芸術館／茨城
2004年　息づくかたち -another world-　ART COURT Gallery／大阪

www.ito-atelier.com

江川純太

EGAWA Junta

300の手紙

あらゆるバーチャルがそれぞれの存在を希薄にしていく時代。何が確かで何が正解で、何処に価値を見出すのか。イメージは繰り返された。まだ終わっていない、答えは無いと。

こんな世界で、私とあなたは分かり合えるのか。共有できるのか。厄介なのは私とあなたの距離だ。近づけば近づくほど遠くなる。あなたが私のことを理解したいと近づいても、私があなたに理解してもらいたいと歩み寄っても、その距離は広がるばかりに思われる。人間という生モノとは今全てを持っていると思われる。それでは何処であろうか？ところで、あなたは今この文章を読んでいるわけだが、私は今この文章を書いている。私の今とあなたの今がつながるこの瞬間は言葉にし難いが、なんともいいものだ。過ぎていく今この瞬間の理解を深め活性化するために私の言葉はあちらへこちらへと飛ぶ。断絶と接続を繰り返す。どこまでが空で、どこからが宇宙だろうか。大気圏が境界だろうか。知識が現実を曖昧にする。北村君は「空ってすごく広いんです」って教えてくれる。３００の衛星は広い宇宙を孤独に回る。地球が彼らをつなぐ。私は地上で３００人の孤独を想像する。空が我々をつなぐ。大事なのは瞬間である。我々はそれぞれ今この瞬間を生きている。その衝動が目の前の現実に向かわせる。過去も未来も今を切り取った側面でしかなく、その中に世界を築き、全てを持っていると思われる。それでは生モノとは何であろうか？ところで、あなたは今この文章を読んでいるわけだが、私は今この文章を書いている。



その瞬間、お前は何を捨てて何を拾うのだろうか。
キャンバス、油彩
41.0×41.0cm
2012年



彼は、冷たいハンドルを掴む手を緩めようとした。
キャンバス、油彩
91.0×91.0cm
2010年



江川純太

1978年　神奈川県生まれ
2003年　多摩美術大学絵画科日本画専攻卒業

個展
2012年　eitoeiko／東京
2011年　正解も不正解も消えた。それが答えなのか？　eitoeiko／東京
2010年　火星の記憶　eitoeiko／東京
2007年　77STUDIO／神奈川
2006年　DISCO GIRL／東京
2005年　77STUDIO／神奈川
2004年　ギャラリー52／東京

グループ展他
2012年　トーキョーワンダーウォール2012入選作品展　東京都現代美術館／東京（'11、'10）
2011年　ULTRA004　青山スパイラル／東京
2010年　OVER TONE Ⅱ　神奈川県民ホールギャラリー／神奈川
2008年　THE NEXT　Gallery Stump Kamakura／神奈川
シェル美術賞展2008　代官山ヒルサイドフォーラム／東京
2006年　8＋江川純太　カタチカフェ／東京
ダンスとのコラボレーション　関さなえ『a・i・su』　ギャラリーマキ／東京

小川直樹

OGAWA Naoki

裏山から月へ

私の制作は、学生時代のドローイングから始まったのだと思います。身体の内に蓄えられたもの、あるいはそのどれとも違うものが紙の上で自分の知らないリアリティを示し出す事に喜びを感じました。思えば昔から、自分の日常性を崩すものや行為に心惹かれています。

ここに、自身の制作にとって重要に感じる3点の事柄を挙げてみたいと思います。

一、実家に帰省した際、早朝からある山に登りました。標高1700mのその山は登山口から朝靄が立ち込め、登る程に霧が風景を覆っていました。気が付くと眼下の展望も頭上にあるはずの空もすっぽり白靄に覆われていて、高い所にいるのかも分からないとてもシンプルな光景が広がっていました。風景や人々が靄の中に消えまた立ち現れて来る様を見ていると、それがあまりに日常とは遠い光景に感じられた為に今いる場所に対して強い揺らぎを感じると共に、現実の景色によってなにかが崩れる事に喜びの様なものを感じました。

二、ふいにやそれに付随するわずかな感覚の断片に心奪われる事があります。それは自身の精神の中で時を経ることによって元のそれとは違う、独立した世界としてある部分に存在している様にさえ感じます。

●夜、青白い月と速く動く雲、周りは黒い山で離れの石段に座っています。山の奥や空からゴオンという音が響いていますが何の音かは分かりません。その音が今はとても気になりますがその時はとても自然なものだったと記憶しています。

●お盆、母方の実家で一泊した日、深夜に目を覚ました子供の目線があり、振り子時計と豆電球に照らされた遺影の写真が見えます。土壁に出ている黒い梁のようなものが二つ、それが龍のようなものに見え両方が音も無く伸縮し、静かに争っているように感じます。子供の私は左側の少し細めの龍が気になります。

●夏の夕暮れ時、坂の上の家に帰ろうとしています。坂の途中で、すでに黒い影を落とし始めた山並みに目が行きます。無数の蝉の鳴き声が聞こえ始め、その鳴き声に連れられ意識が森の奥の方にどん行ってしまう感覚に襲われ、自分の暮らす場所とは違う深淵の世界を垣間見たようで、ぞっとしています。この記憶は私に「境界」というものを感じさせます。

三、夢の中で、自分が本当に一番欲しかった物が手に入ります。それは手で包めるくらいの大きさで鉱石の様にも見えます。喜びに満ち溢れていますが、すぐに不安になり始め薄っすらとこれが夢であると感じ始めます。それでもなんとか「これ」を持ち帰る方法は無いものか考えてみますが、あちらとこちらを繋ぐことがどうしてもできないといった感覚で、最後はそれを強い力で握りしめて持って帰ろうとしますが起きた時には当然手ぶらでした。ダメだったなと思い少し落胆した心持ちで、一日が始まります。

与えられるだけの情報に満足してしまい、通念的な世界観に捉われがちな意識に、重要な距離を与えてくれるのはいつもこの様な自分自身が獲得した経験や記憶であるように思います。自分自身の外界を見つめつつ自己の内面に潜りしかしその多様な要素は混沌としていて、深い部分でりに描き模索し続けていくものではないかざる部分に触れたいにとってこの感覚を頼と感じています。私と願う事は、この世の見えと同じなのだと思います。



portrait in record 7
キャンバス、油彩
100.0×80.4㎝
2009年
photo credit:©Oギャラリーeyes



once apon a time
キャンバス、油彩
145.5×145.5㎝
2011年
photo credit:©Oギャラリーeyes



小川直樹

1984年　島根県生まれ
2008年　成安造形大学造形美術学部造形美術科洋画クラス研究生修了

個展
2012年　Oギャラリーeyes／大阪（北区西天満）にて11月5日～10日迄開催予定
2011年　Oギャラリー／東京
　　Oギャラリーeyes／大阪
2010年　Oギャラリーeyes／大阪
2009年　Oギャラリーeyes／大阪
2008年　Oギャラリーeyes／大阪

グループ展他
2012年　KICKS　Oギャラリーeyes／大阪（北区西天満）にて7月30日～8月7日迄開催予定
2011年　GALAXY　Oギャラリーeyes／大阪
2010年　シェル美術賞展2010　代官山ヒルサイドフォーラム／東京
2007年　PIECES　海岸通ギャラリー・CASO／大阪
2005年　ART & CRITIC　成安造形大学ギャラリー・アートサイト／滋賀

鹿野震一郎

KANO Shin'ichiro

描く事、旗越え

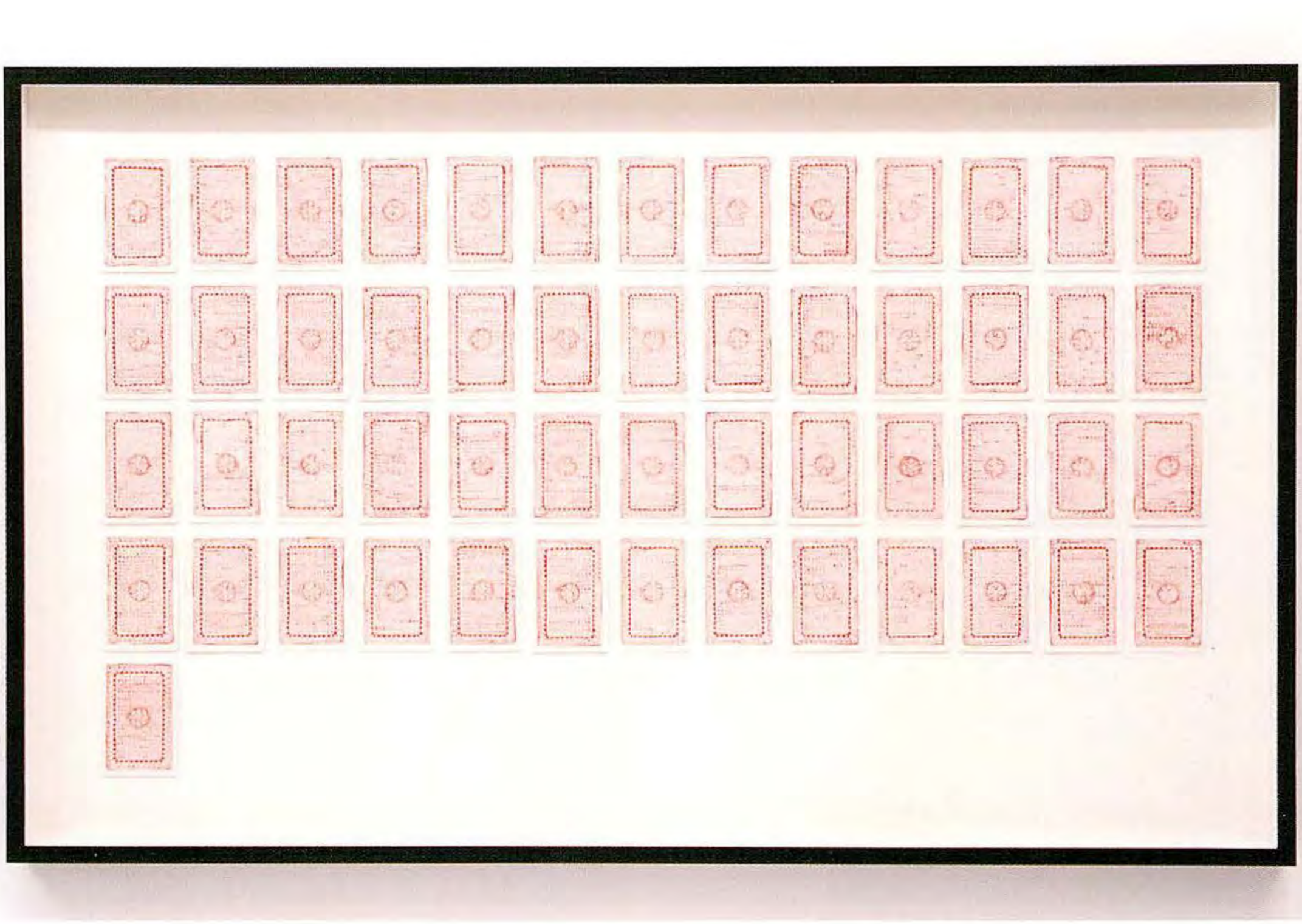
1時をちょっと過ぎた真夜中、アトリエの近所を散歩をしていた時、ある家先の亀の置物を見てある事をふと思い出した。旗を越えてしまったゲームの主人公、スーパーマリオブラザーズのマリオ。

ゲーム内はまったく無駄がなく、すべてが一つの目的の下に順調に回っている。奇々怪々な敵や障害物たちも、ステージが進む度に段階的に難易度を増してゆく。それはマリオをゴールに導くような感じですらある。しかし、その世界はある時にスイッチを切り替えたようにカチリと変調してしまう。当時のゲームにはバグと呼ばれるプログラム設計上の不具合がよくあり、動作不良を起こすことが度々あった。バグの一部は裏技などと呼ばれてプレイヤーに親しまれ、自分もいまだに裏技という怪しい響きには心躍る。このゲームにもそういったバグが幾つか存在した。そのバグの一つとして、ある条件を満たすとゴールである旗のついたポール（本来はそのポールに飛びついてゴールとなる。）を飛び越え、ルール上は決して行く事ができないゴールの先に行く事ができるのである。設計者ですら意図しなかった場所。アトリエと地平線が続き、行けども行けども何処にも辿りつけず、行けども行けども何処にも辿りつけず、軽快なBGMをバックにただ同じ景色のループが続き、寿命であるタイムオーバーまでの時間が淡々と刻まれる。物語は展開を失う。ゴールを目指す、捕われの姫を助ける、様々な事象と関係することで成立している世界で、関係を失いながらも淡々と続いてゆく世界。震える好奇心と、世界から取り残されたような冷たい緊張。しかし、そんな世界でも失われていない関係は残されている。タイムオーバーでマリオの命運が尽きた時、新たなマリオがステージ最初から通常の世界を走り出すのである。マリオも自分の次に新しい自分が控えているとは思いもよらないだろうけど、そこに未来への関係が残されている。

現実とゲーム、裏と表の境目のような、旗を越えた先の場所。バグに最初に遭遇した時、異なる世界が広がったような高揚感、そして踏み入れてはいけない領域に入ってしまった時の恐怖感。

しまったようなジワリとした恐怖感を同時に味わった。それはなんというか、世界の構造に触れる体験をしてしまったらこんな感じかもしれないな、といった様な感触。そしてその風景を実際に少し覗いてみたい気分にもなった。それと同時に彼にも思いを馳せる。なにも知らずにある時に条件を満たしてしまい、裏と表の境のような場所に、旗を越えて踏み込んでしまった主人公マリオ。バグという現象に出会い、思いもかけず通常のルールから外れてしまった彼はなにを想起したのだろうか？世界の構造の一端に触れた様な高揚感にたのか？それとも…。

そんなことをぼんやりと思い出しながら、巨大なキャンバスに埋め尽くされているアトリエに戻った。小さな部屋いっぱいになるまで壁のように立っている巨大なキャンバス。そんな光景にこんな事が頭をよぎった。はて、いつのまにか自分もバグの条件を満たしてしまったかな…。



切り札（53）
トランプ、油彩
57.5×93.3cm
2010-2011年



枝の枠
キャンバス、油彩
27.5×22.0㎝
2012年



鹿野震一郎

1982年　　東京都生まれ
2006年～2007年　バウハウス大学（ドイツ）交換留学
2007年　　名古屋造形芸術大学造形芸術学部美術科洋画コース卒業
2009年　　カールスルーエ芸術アカデミー（ドイツ）／ダニエルロートクラス聴講生（前期・後期終了）

個展
2010年　　2010 PLOT　　loophole／東京

グループ展他
2011年　　4人展　絵画　　shugoarts／東京
　　CHOCOLATS DES FUCHU ～デルトロ府人のレシピ～　　loophole／東京
2010年　　ARTman2010　　豊田市美術館市民ギャラリー／愛知
　　反射する、透過する　　sanagi fine arts／東京
2009年　　painting + architecture　　kunst im hafen／デュッセルドルフ［ドイツ］
　　Hako　　カールスルーエ造形大学、カールスルーエ芸術アカデミー／カールスルーエ［ドイツ］
2006年　　百花繚乱　　boice planning／神奈川

北本真隆

KITAMOTO Masataka

不思議なものでいつの間にか抽象を描くことになろうとは

現在、私は主に光のゆがみやきらめき、色彩の重なりをテーマに制作している。記憶に留まっている情景を元に描き出し、油絵具の特性である流動性や厚み、マチエールを生かしながら描いていく。旅行の際に見た色彩の美しいコントラスト、何気ない日々の中で感じた光の戯れなど、記憶の中に残るものは、具象的な物の形や具体的な話の内容などではなく、時間の流れと共に、細部はもちろん、ものの形象や物語性は溶け出し、色彩の流れや、ゆがみ、曖昧性の中で再び構築される。モンタージュとして成立させる再構築ではなく、それら再構築の過程における時間と運動性、表面性に着目している。

しかし、不思議なものでいつのまにか抽象を描くようになっていた。

もともとは具象、特に細密描写的に描くのが好きな学生だった。写実と言うと正確にはリアリズムで、絵画ではクールベから始まったものだからだろう。けれども、途中からは150号くらいのキャンバス、画面いっぱいにお腹を描いて、太いパイプを刺して立たせたりして、痛そうなものを作っていたからリアリズムに傾倒していったような感じもある。それでも具象的に細部まで描くことを絶対に辞めようとは思わなかったし、むしろ自分の持ち味で、なくしたら自分の作品でなくなってしまうと考えていた。

作品とは制作者の内に潜む意識や感情、観念など眼に見えないものを、素材を通して眼に見えるように具現化したものである。例えば、ラングガー（S.K.Langer 1895～1985）は「芸術家が表現するのは彼自身の現実の感情ではなく、彼が認識する人間感情なのである。（…）それは、高度化された比喩でもあり、言葉でも言い表せないものを明確に意味づける非＝理論的なシンボル、つまり、意識の理論そのものである」と述べる。芸術家の表現とは個人の感情を表したものではない。見たものや経験などから摘出され、凝縮された精神の集積なのである。表現は制作者が表したということを表明することなしに、表されるものである。自身への感情、社会性などを意識的の内や周囲に蓄積し、表したもの、あるいは無意識的に蓄積され、表されたものなのだから、様式に

縛られる必要はない。

また、ジャコメッティは「私をひきつけるのは、それらが深部で似ているからであり、私の愛する画家たちにも共通なあの不思議な類似性、これらの画家たちとのキャンバスの上に、無限に存在させるあの類似性をもつからだ」と述べる。この「類似性」たるものが、私が考える表現であり、むしろ、言葉でいい表すことができる表現とは真相ではなく、奥深く隠れた制作者自身さえもわからないところに芸術家の表現の本性が潜んでいると考える。芸術家なら作品についてすべてを語り尽くしたとしても、言葉ではいい表せないことが残っていると感じたことがあるはずで、この言葉でいい表せない箇所こそが作品に含まれた本当の表現なのである。百枚の異なる方向性の作品を作ったとしても、制作者の底にある表現は、全ての作品に潜んでいる。

美術を志して15年、ある程度自分の方向性があるものの、凝り固まらず、常に揺れ動きながら作り続けていきたい。



Robe of Night
キャンバス、油彩
130.3×162.0㎝
2011年

Prism
キャンバス、油彩
116.7×116.7㎝
2010年





北本真隆

1978年　石川県生まれ
2003年　金沢美術工芸大学美術工芸学部美術科油画専攻卒業
2005年　金沢美術工芸大学大学院美術工芸研究科修士課程絵画専攻油画コース修了
2009年　金沢美術工芸大学大学院美術工芸研究科博士後期課程美術工芸専攻修了

個展
2011年　ギャラリー点／石川
2010年　T.Y.ハーバーブルワリー／東京
　　ギャラリー点／石川
2009年　ギャラリー点／石川
2008年　ギャラリー点／石川

グループ展他
2011年　Lineart －The Art Fair－　Flanders Expo／ゲント［ベルギー］
　　プリュス・ジ・アート・フェア　東美アートフォーラム／東京
　　Carré　ギャラリー点／石川（'10～'08）
　　ノマディック・サーカス　北海道立近代美術館／北海道
　　Existence of TEN　ギャラリー点／石川
2008年　Miraiten　金沢市民芸術村／石川
2006年　Field of now　銀座洋協ホール／東京

きむらかおり

KIMURA Kaori

自己を手放す

考えてもわからないことの答えを探していて、でもわからなくて考えないようにしていたけど、時たま思い出してしまい苦しいという状態になったことは皆さんもあるのでしょうか。

私は、考えてもわからないことには、そういう苦しい状態がついてまわるものだと思っていました。

でも、わからないことには、それはわからないことだ、という答えを出せると教わって、それこそ本当にわからないことについて考えなくなったとも言えるのですが、雲が晴れたようにすっきりしました。

すっきりしたら、色々と考えたり想像したりできました。苦しくなるような答えのでないことも、それは答えのないことだから、そのままでオッケーというふうに。

私は最初、宇宙の果てってあるの？と思っていて、今のご時世色々見れたりするけど、結局のところわかんないよって。

地球の始まりとか、その辺のことどうなの？と思ったら、細かいことはわかんないよって。

でも私自身のわかんないことに組み込まれてる一員なんだよねって。

わかんないことは膨大すぎて、私は小さすぎて、量の違いに吐きそうになるけど、組み込まれているのだから、膨大は私でもあると。

そんな風に考え始めました。よくある思想ですけれど。

私って何？の答えを、人は、私はあの会社に勤めていて、あれが好きで、あの町に生まれて、と詳細な自己で答えを出そうとするけど、私って言う存在って何？って意味の、私って何？だとすると、詳細な自己で答えようとしたら迷子になってしまう。自己を手放すことは、存在という考えてもよくわからないことに近づける唯一のことだと思います。

さて、私は自分を溶け込ませることで、理解できない平面的な広がりと同時に、色とりにより生じる奥行きを感じる配置を大切にしています。

キャンバスの中に、しぶきや色の点が良い具合にあると、ボーっと画面を見ることができます。絵がうまくいくと画面を見ることができます。ポカーンとしている状態に似ていると思います。それは、自己を手放している状態に似ていると思います。



おうど
キャンバス、油彩
181.8×227.3cm
2012年



よいぴんく
キャンバス、アクリル
91.0×116.7㎝
2010年



きむらかおり

1986年　東京都生まれ
2008年　阿佐ヶ谷美術専門学校絵画表現科卒業

個展
2012年　きむら かおり 展　人形町Vision's／東京
2011年　きむら かおり 展　ギャラリー檜B／東京
2010年　きむら かおり -展示・公開制作-　人形町Vision's／東京
2008年　きむら かおり 展　gallery art point／東京
2007年　木村香織個展　ポーンと宇宙に飛んでって　m-c-r／東京

グループ展他
2011年　New Year Selection 2011　gallery art point／東京
Camouflage展　表参道画廊／東京
interactive-YIUTH-　ギャラリー檜B・C／東京
2010年　拡がるLOVE　銀座1丁目ギャラリー／東京
UZU展　ランプ坂ギャラリー／東京
ARTシャワー横浜展　横浜市民ギャラリー／神奈川（'09）
Reflections - 現代アート新鋭作家13人展 -　gallery art point／東京
2009年　東京アンデパンダン展　gallery COEXIST／東京
ディスプレイ展示　堀商店／東京
ASSISTANTS EXHIBITION　人形町Vision's／東京
2008年　JAALA　第16回日本アジア・アフリカ・ラテンアメリカ交流美術展　東京都美術館／東京
壮年前期　人形町Vision's／東京

久後育大

KUGO Ikuhiro

集積されたもの

緩やかに伝わってくるものや、考えさせられるもの、また物質としてよりも、感覚的に伝わるものに引かれる。

これは作品を創る時だけでなく、作品を観る場合にも同じことを感じている。この様な考えから作品のテーマが生まれてきているのかもしれない。

規則正しく密集し蓄積された集積物からは、そのもの達が完成するまでの時間の経過をイメージし予測することができる。また積み重ねられる経過の中で無数の情報が組み込まれているようにも感じ取ることができる。

例えば、礫等の砕屑物や火山灰、生物の遺骸などが降り積もりと、長い年月をかけ隆起と沈降を繰り返すことにより出来る地層、成長の過程が刻み込まれた植物の年輪、またはトランジスターの並ぶ集積回路といった機械的なものからも同様の情報を感じ取ることができる。

私の作品には紙に彩色を施し無数の線が引かれている。彩色を施し作成された作品にはどのような場合も退色や条件等色といった色彩の問題が出てくる。しかしさまざまな負荷を受け退色した色材からは調色ではとのできない時間の痕跡が色に現れ表すことができる。

また、作品は置かれる空間によって常に変化するように感じる。

制作時に見えていた色彩は空間が変化すれば当然の如く見え方や作品の印象も変化する。空間だけではなく観者の感情の変化や状態、体調等によっても変化を続け、決して一定ではない。だからこそ私は空間や光源、時間の経過により変化し劣化する色材には情報を可視化させる力があると考え、それを時間の経過を表現する一つの手段として用い、線を引く行為により地層や集積回路と同様、時間の痕跡を作品に落とし込みこのような考えから近年では作品に Trace（痕跡）というタイトルを付けており如何に画面上に時間の痕跡を定着させ、観者に蓄積される過程で組み込まれる情報を感覚的に伝えることができるのかを模索している。



Trace-82
木版（土佐和紙、顔料）
80.0×55.0cm
2011年



Trace-70
木版（土佐和紙、顔料）
120.0×228.5cm
2010年



久後育大

1977年　兵庫県生まれ
2002年　創形美術学校研究科卒業
2007年　多摩美術大学大学院博士課程前期修了

個展
2011年　ギャラリーあらき／新潟
2010年　ギャラリーエムスタジオ／新潟
　　アートギャラリーミューズ／群馬
　　ギャラリーあじさい／兵庫
2008年　アートギャラリーミューズ／群馬
2007年　ガレリア・グラフィカ bis／東京
2003年　Oギャラリー／東京
2002年　コートギャラリー国立／東京

グループ展他
2011年　第16回ソウル空間国際版画ビエンナーレ　OCI Museum of Art／ソウル［韓国］
2010年　第14回中華民国国際版画ビエンナーレ　国立台湾美術館／台北［中華民国］
　　international Print Network(International Print Triennial)Krako-Oldenburg　オルデンブルグ［ドイツ］
　　The "Iosiflser" International Contemporary Engraving Biennial Exhibition　プロイエ［ルーマニア］
　　Douro 2010国際版画ビエンナーレ　ドウロ美術館／アリージョ［ポルトガル］
2009年　Rosanna Rossi Ikuhiro Kugo　ローマ［イタリア］
2006年　BIMPE 4 The Fourth Biennial International Miniature Print Exhibition　バンクーバー［カナダ］
2004年　第38回文化庁現代美術選抜展　岩手県立美術館／岩手、高梁市歴史美術館／岡山、他巡回展

http://kugoikuhiro.com

佐藤理恵

SATOH Rie

絵のこと

厳かで善美を尽くした大聖堂。
貴族たちが暮らした絢爛豪華なお城。
華やかで装飾的な家具や調度品。
優雅で甘美なフランス・ロココ時代。
数百年前偉大なる画家たちによって描かれた美しい宗教画や神話画や肖像画。

幻想的で物語的、圧倒的で非現実的、装飾的で貴族的で享楽的なものたちは、常に私の興味・関心を引き、魅了し、わくわくさせてくれます。
そんなとき私はいつも絵が描きたくてたまらなくなります。

感興・嗜好に導かれて描くことで、自身の内面にある漠然とした感覚やイメージを引き出し、画面上に表出させ、それを認識可能にします。
その表出された空間には、私にとって心地よい色やかたちやマチエールによって構築された、明るく愉快でロマンティックな世界が広がっています。
そこには、不安や苦悩や悲しみなど感情は存在しません。

制作するうえでも、ネガティブな感情はなるべく持ち合わせないようにしています。
なぜならばそういった感情は私の絵画空間に決して良い影響を与えないからです。

しかしながら、現実世界では不安や苦悩というものは付いてまわるのが常です。
影響されずにいようと心がけていても、予想外の出来事や不測の事態というものは突然、ときにじわじわとやって来て、私たちの心身をおびやかします。

それでもだからこそ、絵の中の世界だけはそれとは無関係で、ただただ幸せで愉快でいてほしいと思うのです。

このうえない目の快楽、という言葉を何かの本で見たとき、とても気に入りました。
目から入ってきた楽しさが全身に広がって、幸福感で満たされるような、そんな目が喜ぶ作品を作ってゆきたいです。



オリバーレス伯・公爵騎馬像（ベラスケスによる）
パネル、綿布、アクリル
194.0×162.0㎝
2011年

ミラー
パネル、綿布、アクリル
117.0×91.0㎝
2010年





佐藤理恵

1984年　神奈川県生まれ
2009年　東京造形大学美術学科絵画専攻領域卒業
2011年　東京造形大学大学院造形研究科美術研究領域修了

個展
2010年　GALLERY TRINITY／東京

グループ展他
2011年　シェル美術賞展2011　代官山ヒルサイドフォーラム／東京
ROPPONGIαART WEEK 2011　GALLERY TRINITY／東京
2010年　Art Program Ome 2010　勝沼公会堂／東京
2009年　FIXED POINT'09　Gallery惺／東京

sokami

結露

自分がそこに居なくていいから気に入っている。

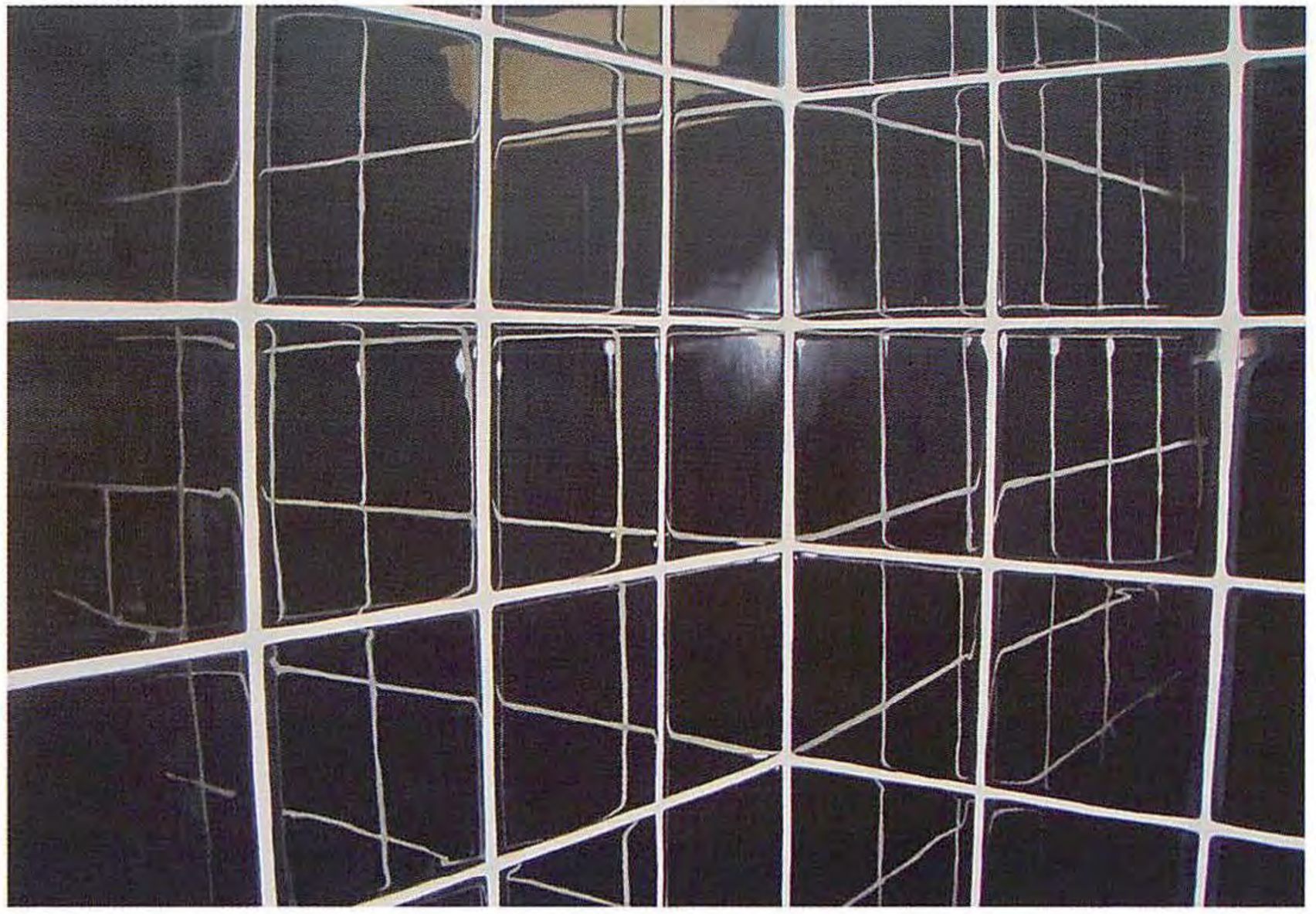
やらないだけか、やらないだけか、確かめているだけかもしれない。

今はいい女と旅行に行きたい。

三泊四日、そのくらいが丁度いい。

幸せになりたいと思う。





Tile
キャンバス、油彩
各80.3×116.7㎝
2010年



Cloth stripe
キャンバス、油彩
130.3×162.1㎝
2009年

sokami

1977年生まれ

03sokami@gmail.com

髙岡美岐

TAKAOKA Miki

作る風景

昔から私は自己顕示欲が強く、自分の存在、考えたもの、作ったものを外に発さずにはいられない人間であった。それ故、人間関係では物凄く苦労し、あまりでしゃばったりおしゃべりになってはいけないと、自分に言い聞かせながら生きてきた。

学生時代、油彩を学びながら演劇部に属していた。日常と違う異空間を作り上げ、観客とその空間を共有することの楽しさを経験し、作り上げる過程で人と協調し、お互いを尊重しあってコミュニケーションをとることも大切で重要であることを学んだ。ちょうど同時期に、授業で油彩を描いていて思った。画面に絵の具全体を構成し、どれを筆やナイフ等で塗り込めて制作することで役者にもなれ、画面を考えることで演のように表現していくかもなれるのではなく出家にも、様々な裏方にも、演劇やインスタレーションのように異空間を直接的に表せなくても、平たい一枚の画面の中の空間を通じて、表現するものと観るものが、声を出さなくても、動かなくても、密やかに間接的に共有していける。私はそこに、強い魅力を感じた。

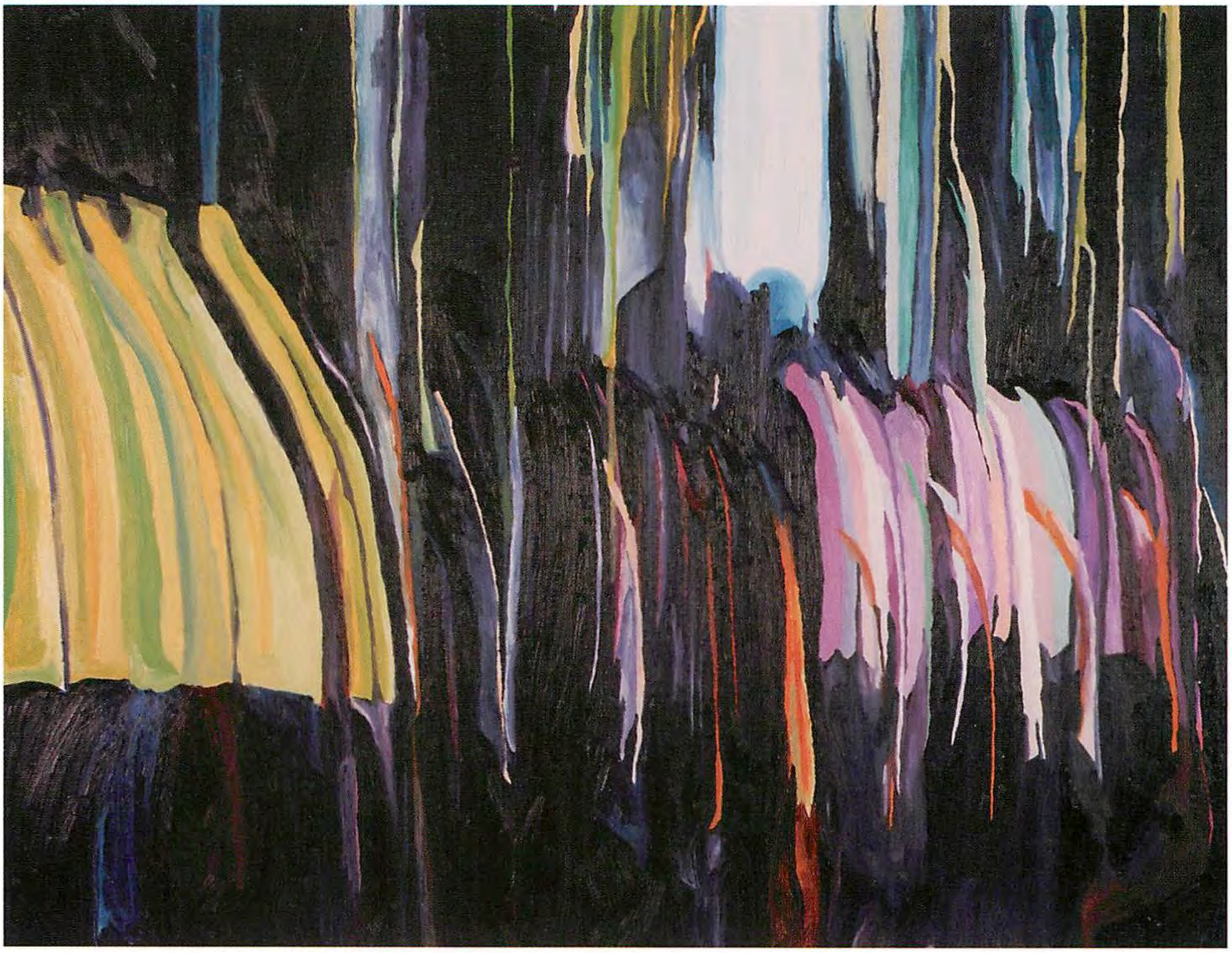
油彩を描くにあたり、日々生活していて、心の琴線に響いて、動いたものを描きたいと思っている。まず、心を動かし、響かせた根源である対象物にじっくり向き合い、観察する。その対象となるものは、私の心が動いて、響いた瞬間に見えていた風景と物体を指す。その間にも時間は経過し、気候と季節も変わり、私が動けば対象物の風景の視点も動く。しかし、それらの変化、風景が動いてゆく過程も全て記録する。記録する方法は、携帯電話に内蔵されているカメラで歩きながら一瞬一瞬を撮影し、それらを全て現像せず、スケッチブックに描いてゆく。時には対象のある現場に赴いて、そこで制作するときもある。カメラの中に記録された、見たままの風景ではない自分の手と感情を使った、自分だけにしか作れない歪んだ風景を一枚一枚記録してゆく。描きながら、そこへ初めて対峙した時の

「動いた」「響いた」思いも、注ぎ込んでゆくので、全てスケッチブックに描き終えた時、それらの風景には、何の感情も湧かなくなっている。

油絵具の質感、色彩の鮮やかさがただ純粋に好きだ。油彩では絵の具の色と色を混ぜて連ならせて、筆跡の動きに思いを感情を託して、画面に空間を作りたい。そして画面に描こうとする対象を、あの日描いたスケッチブックの中から、一枚取り出して眺める。あの時とは違うまっさらで新鮮な気持ちで、風景を一枚選んで、その色彩をキャンバスに油絵具で描く。風景の裏に書いている日付けを見て思う。

「ああ、あの時、私はこんな色を見ていたのか」

抜け殻状態のスケッチブックの数年前の風景に、あの時とは違う、新たな思いをキャンバスに注ぎ込む。



08.12/1.17：15　04
キャンバス、油彩
112.2×145.5cm
2009年

03.1/1.14：06　01
キャンバス、油彩
22.1×27.3㎝
2011年





髙岡美岐

1979年　京都府生まれ
2001年　京都芸術短期大学専攻科美術専攻洋画コース卒業

個展
2012年　Oギャラリーeyes／大阪
2011年　アートスペース虹／京都
2010年　アートスペース虹／京都
2009年　Oギャラリーeyes／大阪
2008年　アートスペース虹／京都
2007年　Oギャラリーeyes／大阪
2006年　アートスペース虹／京都
2004年　アートスペース虹／京都
2002年　立体ギャラリー射手座／京都

グループ展他
2012年　二人展　ギャラリーメゾンダール／大阪（西区靭本町）にて9月開催予定
2011年　CHIC ART FAIR　C'ite de la mode et du Design／パリ［フランス］
Ma chanson favorite vol.4　E-ma／大阪
京展　京都市美術館／京都（'09、'05、'04）
2010年　P&E　アートコートギャラリー／大阪
自由美術京都作家展　京都府立文化芸術会館／京都（'07、'06）
2009年　トーキョーワンダーシード　トーキョーワンダーサイト渋谷／東京
2006年　第44回関西自由美術展　京都市美術館／京都
2005年　シェル美術賞展2005　代官山ヒルサイドフォーラム／東京
第69回自由美術展　東京都美術館／東京
2003年　第12回全日本アートサロン絵画大賞展　大阪市立美術館／大阪
2002年　第50回西脇市展　西脇市市民会館／兵庫

高田理美

TAKADA Satomi

風景

三年前、私は初めて光のない道を歩きました。

学校の講義で訪れた青森での田舎道。車道ではあれ、私は友人と、生まれて初めて夜に明かりの灯らない道を歩きました。そこは一歩足を進めることすら恐ろしく、風の音や葉が触れ合う音、踏みしめる葉や枝がそのものではないように感じられました。そして突然、目には見えない何かが目の前に現れ、その瞬間私と友人は恐怖に耐えられず道を走りぬけたのです。そして、そこで目にした遠くに見えるかすかな光。この時得られた安心感は言葉にはできないほど感動的なものでした。

当たり前のように存在し、そこにあるという絶対的な物が欠けた時、人は改めてその欠けた物が自分にとってどのような存在であるのかに気付けるのかもしれません。この体験は今も私の外の世界を見つめる時の感覚に影響を与えています。

私は、光と影が作り出す、物に映り込む像や影など、実体そのものではなく、実体が残す「存在感」、また、時間の経過によってできるその物が辿ってきた軌跡をモチーフとして描いてきました。

雨上がりの澄んだ空気の中で見える青みがかった濃い影。

日が沈む時間に色彩が消えて、全てのものが平面的に見える瞬間。

そして時間の流れによって色彩が混ざり合い、その中に残る光の線。

それはなにげなく日常で目に飛び込んでくる景色であり、また、写真に収めた時の み形が残る、普段は目では見ることのできない景色であったりします。

私が描くそれらの風景はいつも通る道端の風景であり、私自身がその風景にいつも何かを感じられる訳ではありません。きっかけは私の精神的な揺れであったり、偶然が作り出すその一瞬だけの色であったりと、いまだにその瞬間に確かな条件を見出せてはいないのです。しかし突然いつもの風景

が言い知れぬ意味をもつような特別な、そして美しいものに見える瞬間が訪れ、それが私の描くことへのきっかけを与えてくれるのです。

私の作品は私のフィルターを通して見た時間であり、作品を観る人はその時間に立ち会うことになります。しかし、そこに共有や共感はいりません。観る人が作品とその人だけの時間を過ごせるような作品を私は描いていきたいのです。



H-123
キャンバス、アクリル
60.6×72.8㎝
2011年







左：Piece1
22.0×27.3cm
中：Piece2
27.3×22.0cm
右：Piece3
45.5×53.0cm
キャンバス、アクリル
2011年（展示風景）



高田理美

1985年　北海道生まれ
2008年　名古屋造形大学造形学部美術学科洋画コース卒業
2010年　東京造形大学大学院造形学部造形専攻美術研究領域修了

個展
2011年　高田理美-流線光-　C'est mignon／東京
2010年　MARK OF EXISTENCE　The Artcomplex Center of Tokyo／東京
　　高田理美展　十一月画廊／東京
2009年　Fresh2009 高田理美展　伊勢現代美術館／三重

グループ展他
2011年　瓜生剛・オムヘラン・高田理美展　Shonandai My Gallery／東京
　　表現　ART STUDIO TOBIRA／北海道
2009年　トーキョーワンダーウォール公募2009入選作品展　東京都現代美術館／東京
　　SET ON THE PLATFORM　SPACE/ANNEX Gallery／東京
2007年　北の大地ビエンナー2007 入選作品展　中札内文化創造センター／北海道
2006年　C～展　名古屋造形大学Dスペース／愛知

戸谷　森

TOYA Shigeru

みたことのない迷い方

車や自転車で意味もなくウロウロするのが好きです。かといって全くの無作為に動きまわっているという訳ではありません。半分は意識的にウロウロしています。そして自分の見慣れた風景と違う場所をみたいという気持ちもあります。ですので自転車の場合は、かなり意識的にならないと見知った地域から出るだけで、かなり時間がかかってしまいます。半意識的な徘徊だと思っています。

徘徊する時に最も重要なのはだいたいの方角を考えることです。普段用事の少ない方角を選びます。所沢市からみて西側か北側に行くことが多くなります。東京都の北側を東に進むこともあります。また、大きな道路も避けます。そして交差点では知らなそうな方に曲がります。これは、経験と勘で決めます。青看板があったら家から遠そうな地名の方に進みます。こうやって進んで行くと稀にですが、自宅の方向がわからなくなるのです。この時には、道に迷ってしまった不安と驚くべき何かに出会えるかもしれないという期待の混じった何とも言えない気分になります。そして、このルートを辿ってここに来た人間はいないだろうという達成感も味わうことができるのです。

道がグリッドになっていない地域や田んぼの中などの古い道を多く通ると、わからなくなることが多い気がします。道がグリッド状になっている町は迷いようがないのです。ただ、似た家が並んだ住宅街や工業地帯などではグリッドから出られないという迷い方をする場合があって、これは良い迷い方でなく焦りとイライラばかりがつのります。

一度、どうやって行ったか忘れるくらいに彷徨って、埼玉県の杉戸町という所で迷って所沢市の方角が解らなくなったことがありました。看板に出ている周りの地名も知らなくて、完全に迷いました。

知らない町の名前でしたが、田んぼが広がっていて、のどかできれいな風景の場所でした。こうやって来なければ、知ることの無かった場所を知ることが出来たことが嬉しかったのを覚えています。そのときに杉戸町を知ったので次からは目的地にすることも出来ます。地図で調べてもっと早く

行くことも出来るでしょう。しかし、あのときのルートは、複雑で二度と再現出来ない気もします。

また逆に、杉戸町を出発して僕の辿った、訳の分からないルートで所沢市にたどり着く人がいたとしたらと想像したら、不思議な気分になるのです。僕が杉戸町のと同じ様に杉戸町の人も所沢市には用事がないがないんじゃないかと思うからです。

知らない場所に出会うには、大まかな方角を決め、自分の中で決めた一応のルールに添うことで、ある程度は確率が上がるだろうと思っていますが、あくまで確率が上がるだけですから「引き」が悪ければずっと見慣れた風景が続くことになります。しかし、道を辿るルートはいくつものパターンがあって、そこへ行くまでの道のりが変われば、辿り着いた所は同じでも少し違った場所に感じることが出来ると思っています。そのための方法を考えることに、一番の関心があるのかもしれません。



15年の麻酔
キャンバス、油彩
227.3×227.3㎝
2011年
photo by 若林勇人



通仙散
キャンバス、油彩
181.8×227.3cm
2011年
photo by 若林勇人



戸谷　森

1980年　埼玉県生まれ
2005年　多摩美術大学彫刻学科卒業
2007年　多摩美術大学大学院油画科卒業

個展
2011年　絵のまえで、絵のうしろで、目のまえで、目のなかで　秋山画廊／東京
2010年　make the wall　秋山画廊／東京
2009年　It's like this, it's like that　秋山画廊／東京
2008年　national nursery　秋山画廊／東京
　　it's about that time　トキ・アートスペース／東京

グループ展他
2012年　P.I.C.K.U.P　秋山画廊／東京
2011年　VOCA 展 2011　現代美術の展望－新しい平面の作家たち　上野の森美術館／東京
　　そうさく的なものの明日に　ギャラリーかれん／神奈川
2009年　rule of　Zaim ／神奈川

土井奈々恵

DOI Nanae

REAL

以前見た風景を回想する、過去を振り返る行為と、まだ見ぬ極めて偶然的な自分のタッチへの好奇心。過去と未来を交差しながら、いま、描いているというリアリティを感じたい。絵を描く人間としてとても単純な動機のように思う。

風景のなかに、人物が登場することが多い。あいまいな感覚が、情景への懐かしさや自分のものには決してならないもどかしさと重なる。形となりきれない姿が、闇となり光となって、視界に現れてくる。雨の日に透明な傘から、夜の街灯を見た時のように、私にとってはそれがごくありふれた日常なのだ。



figures
紙、油彩
59.4×84.1㎝
2009年



figures
紙、油彩
45.0×63.0㎝
2010年



土井奈々恵

1987年　長崎県生まれ
2010年　武蔵野美術大学造形学部油絵学科卒業

グループ展他
2010年　武蔵野美術大学卒業制作展　Figures　武蔵野美術大学学内／東京
2009年　ROMP展　武蔵野美術大学学内／東京
2005年　長崎日大高校デザイン美術科卒業制作展　高校Q児　長崎県立美術館／長崎

永山真策

NAGAYAMA Shinsaku

アトリエ

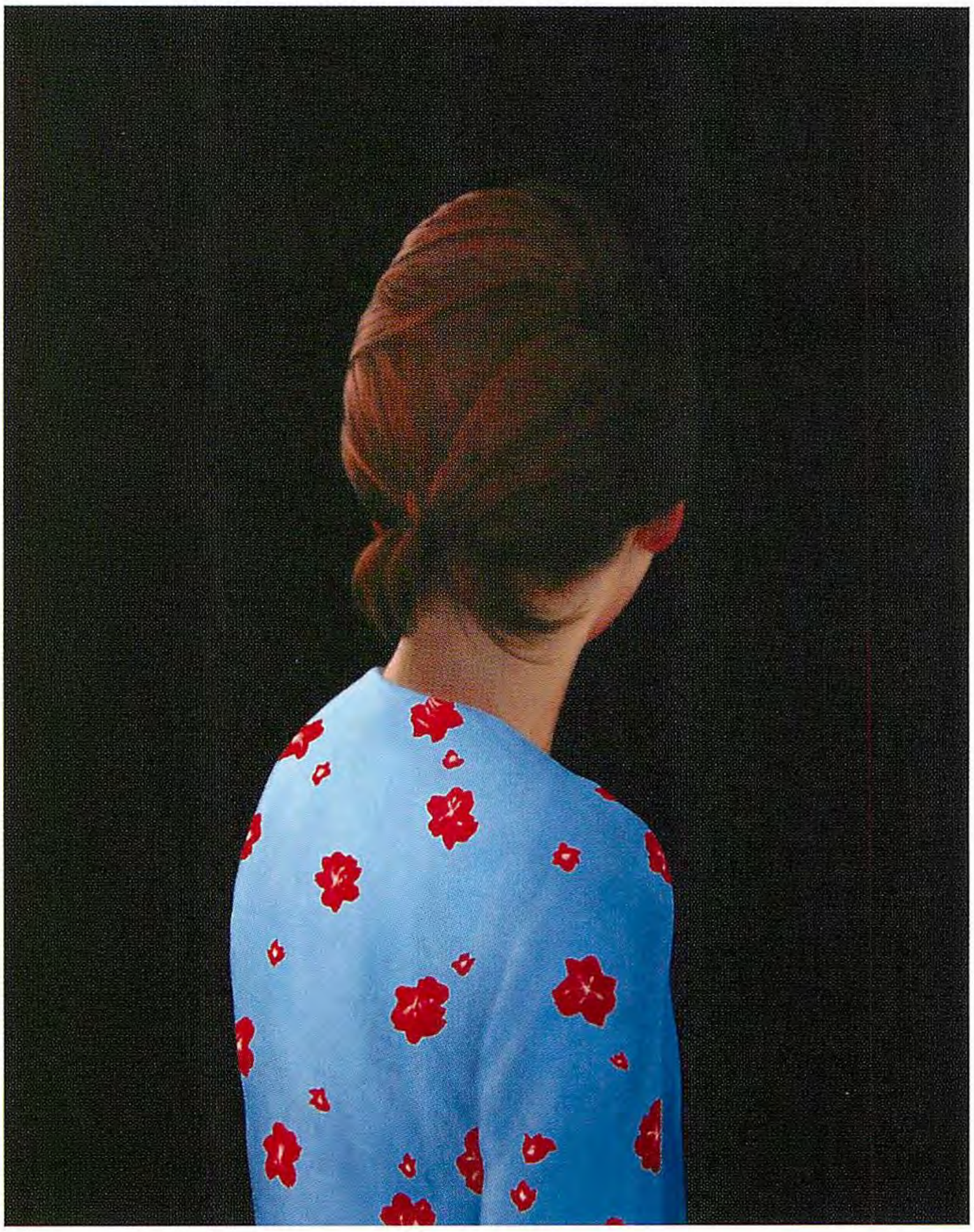
学生時代は制作スペースに困らなかったが、大学卒業後はアトリエを借りる余裕もなく、自宅の4畳半の部屋をアトリエにした。しばらくして、運良く1年間広い共同アトリエを使えるようになったが、仕事で疲労していた私は広いアトリエに通う体力もなく、結局自宅の4畳半で制作していた。実家に帰ってきて2年間は6畳の部屋がアトリエになった。

このままではまずいと思ったのか、1年間だけでもと考え、思い切って広いアトリエを借りたわけだが、気づけばもう3年半が過ぎた。

私の場合、制作スペースの広さと制作ペースはかなり比例する。最近考えるべきことが増え、なかなか思うように絵が進まないことが大半を占め、頭の中がスッキリしない状態が続いている。それは制作以外のことは全てが新鮮で、制作に没頭できたのを鮮明に記憶している。アトリエを構えた時も変えてみようと思っそろそろアトリエでている。



Amy 2
キャンバス、油彩
162.0×130.0㎝
2012年



Portrait 24
キャンバス、油彩
91.0×72.7㎝
2009年



永山真策

1974年　　長崎県生まれ
2000年　　愛知県立芸術大学美術学部油画専攻卒業
2002年　　愛知県立芸術大学美術研究科油画専攻修了

個展
2010年　　Gallery MoMo Ryogoku／東京
2008年　　switch point／東京
2004年　　3号倉庫／福岡

グループ展他
2010年　　陸離として　　代官山sedona ／東京
2009年　　白昼夢　　愛知県美術館ギャラリー／愛知
2007年　　パーティ　　3号倉庫／福岡
2004年　　mono　　3号倉庫／福岡

箱嶋泰美

HAKOSHIMA Yasumi

制作について

私は幼少時に父の仕事の関係で、タイのバンコクに二年間暮らしました。

たった二年間、幼い時期に過ごしただけなのに、この経験は自分にとってとても強烈な印象でした。香辛料や排気ガスの匂い、常夏のムワンとした空気、人々の衣服の色や、着色料たっぷりのジュース、食べ物の色。ごちゃごちゃと入り混じった熱気と派手な色彩に溢れていて、その頃美味しいとは良く分からない言葉、その人が暮らす環境は、表情や、身な思えなかったタイ料理、慣れない幼稚園生活に毎朝泣きながらバスに乗せられて通いました。

帰国後、それはひとつの思い出として時が過ぎましたが、日本で美術大学に進んだ頃、父が再びタイに仕事で赴任しました。

当時、私は制作を続けていくうちに、中学時代から熱中し始めた油絵において、自分の絵画とは、自分の原点とは、と考えるようになっており、父を訪ねて再訪したタイで自分の原点に戻ったような気がしました。

旅行としてではなく、一定の期間この地で生活、制作をしてみたいと思い、大学卒業後にバンコクのシラパコーン大学に二年間留学し制作しました。

日本で学んでいた頃には、方法を先に考えてしまいがちになり、描きたいものを描くというより、作品をつくる、という結果を求めていたような気がします。

タイに限らず、日本を含め世界ではどの国でもいろいろな人種がそれぞれの立場と環境で生きていて、人のものごとの見つめ方、そこに流れていく時間のはやさは当然ちがい、その人が暮らす環境は、表情や、身なりや行動にも表れます。それらは独特で、ときには過度に個性的であったり、自分の文化と異なり過ぎているために、不釣合いでユーモラスに見えたり奇妙に感じることもありますが、周囲のものと混ざり合って、そこにだけ起こり、見える景色があります。

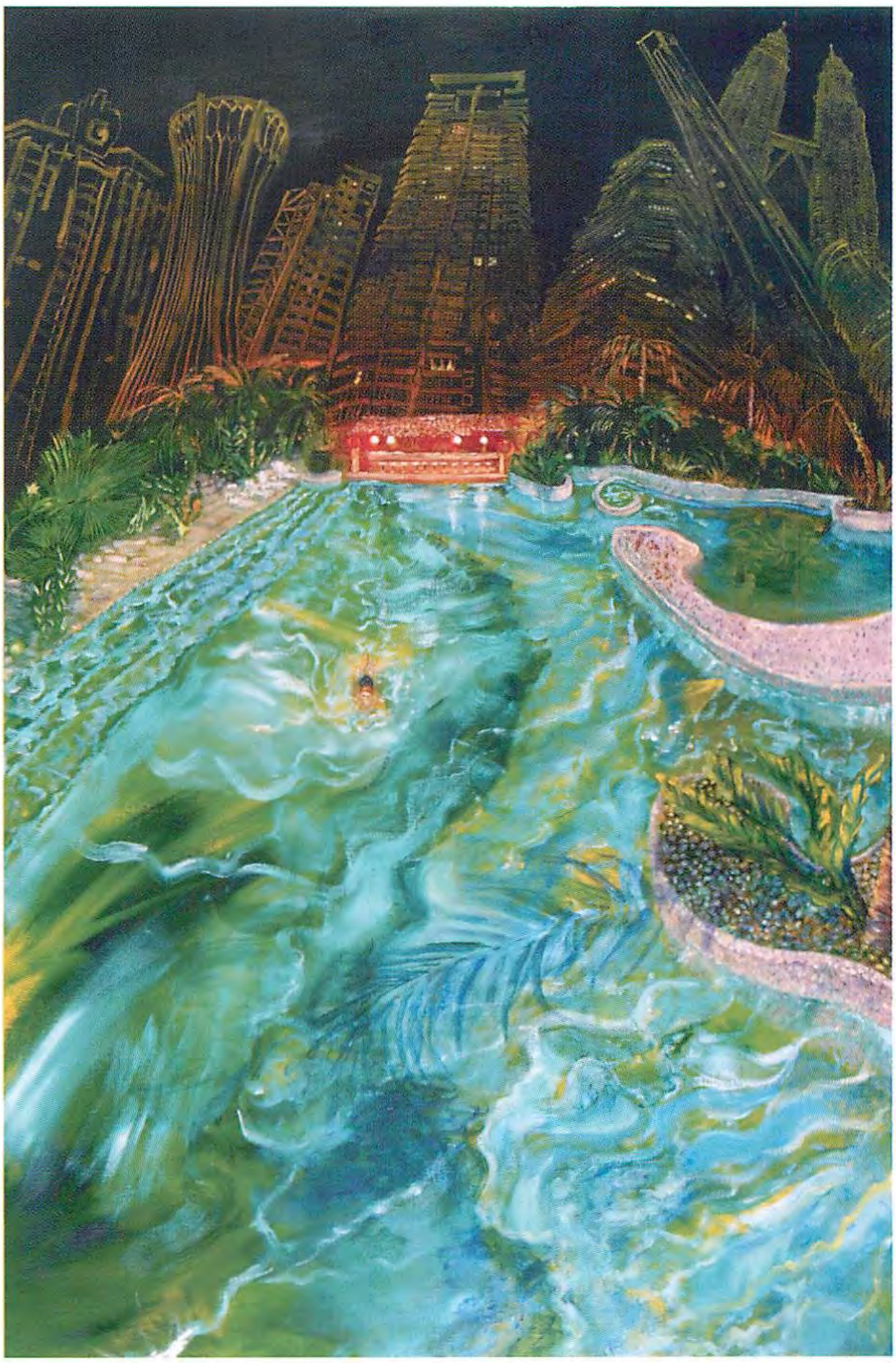
長い年月を経て培われた頑丈なもの。積み重ねた努力や経験が姿や表情に現れている人。

熟成されたその人なりのスタイル。わが道をゆくたくましさ。

そのような分厚い光景に惹かれます。

私はそれを見つけたとき、何か新鮮ですばらしいものを発見したような気持ちになり、

次の作品を描き始めます。
出会った人物や光景を、描きたいと思ったときに自分が持った印象をできるだけそのまま保ち続け、描き上げられると良いと思っています。途中で余計なことを考えたり、付け加えたり、迷いが生じてブレたりすると、絵のなかを行ったり来たりし過ぎて、ドロドロになってしまうこともあります。常に勘を研ぎ澄まして自分にとって必要なものは何かを見極めていけるように、描いて描いて鍛えたいと思います。



一日の終りに／In the end of the day
キャンバス、油彩
194.0×130.3㎝
2011年
photo by 小椋安幸





リゾートコンシェルジェ／Resort Concierge
キャンバス、油彩
130.3×194.0㎝
2009～2010年
photo by 小椋安幸

箱嶋泰美

1979年　愛知県生まれ
2002年　東京造形大学造形学部美術学科絵画専攻卒業

個展
2012年　箱嶋泰美 My Life　南天子画廊／東京
2011年　箱嶋泰美 That's the spirit！　南天子画廊／東京
2010年　I met you ～少し笑って。　Sundries ／東京
2009年　Your story　Gallery Jin Projects ／東京
2008年　Happy-go-lucky　Sundries ／東京
2007年　バスに乗って　Gallery Jin Projects ／東京
2006年　Have a nice day　art space kimura ASK? ／東京
2005年　Discovery - That's the way, I like it!　シラパコーン大学絵画・彫刻・グラフィックアート学部アートギャラリー／バンコク［タイ］
2003年　箱嶋泰美展　フタバ画廊／東京

グループ展他
2012年　第31回損保ジャパン美術財団選抜奨励展　損保ジャパン東郷青児美術館／東京
2011年　明るく絶望する　かんらん舎／東京
四郎かマチルダ　現代 HEIGHTS Gallery Den &.ST ／東京
LIKE A DREAM　Sundries ／東京
2010年　群馬青年ビエンナーレ 2010　群馬県立近代美術館／群馬
ぴんきら　現代 HEIGHTS Gallery Den &.ST ／東京
2009年　ええ顔してるがな　かんらん舎／東京
2008年～ 2009年　KRUNGTHEP226（Bangkok 226）　Bangkok Art and Culture Centre ／バンコク［タイ］
2008年　Global Warming! A Million Ways to Cool Down　TK Park (Thailand Knowledge Park) ／バンコク［タイ］
2007年　No Wall: Art and friendship Exhibition　Kuru Sapha Printing House ／バンコク［タイ］
2006年　束の間美術館ソイサバーイ　Rajata Art House 他／バンコク［タイ］
2004年　WHATEVER WILL BE (WILL BE)("Here and Now" 展内)　OLD 22 JULY HOTEL BUILDING ／バンコク［タイ］

古畑智気

FURUHATA Tomoki

投げ返されてもなお

もう陽が落ちかけていた。冬が近づいている。もうすぐ12月だ。激動の年、乱世の予兆のする一年だったと思う。ぼろぼろの服を着て、自転車で向かう。すでに陽は高く昇り、昼過ぎだ。アパートは少し離れたところにあり、アトリエは自転車で15分ほど。ありがたいことに割りと広いが、冬はとても寒い。シャッターを勢いよく開けた。私はまだ何も決断できずにいた。それは、人生について、生活、仕事、精神的なもののあらゆる事象についてだった。正しさについて、愚かさについて、不確定性についてだった。考えていた、というよりも悩んでいたに過ぎず、自らで不安を煽っていた。「答えはない」そう言い聞かせたのは、自分自身においてだったが、私はまだ悩むことをやめずにいるようだった。答えがないのはなぜだろう。「哲学的」な問い。すなわち、生きる目的や個人の価値、存在することとは何か。そんなものに普遍的な答えがあるわけではないだろう。しかしながら、それでも問うこと自体の価値や目的が消失するわけではないことを私たちは知っている。必ずしも何かを問うことは正しくない。問うことは何かを問題視するということだし、消極的でもある。だが、本質的な問題や、目的論的なずれを問題にしないことが間違っているのは明らかだ。けれどなおも、悩まずにはいられないのは私だった。

まずはスタート地点が必要だ。前提：すべて作品は未来へと表現される。作品は痕跡または過去という時間性を持っている。しかし、作品がつくられる時点において、作品は現在とともに未来の時間性をも持つはずだ。作品は今を表現させると同時に未来へ、すなわち不確定性へ表現される。

赤の隣に何色を塗った方がいいのか。それは結局は塗った後にしかわからない。できた絵は壁に掛けられて初めて作品になりえるのだろう。作品になる、それは一つの結果だ。評価を得る。これも一つの結果だろう。しかし、そこに見出せる原因はない。結果にはなりえない結果だ。すなわち、いつもそこには不確定性しかない。作品は表現をその不確定性に投げ入れ、またその不確定性ゆえに自分へ投げ返されるのだ。

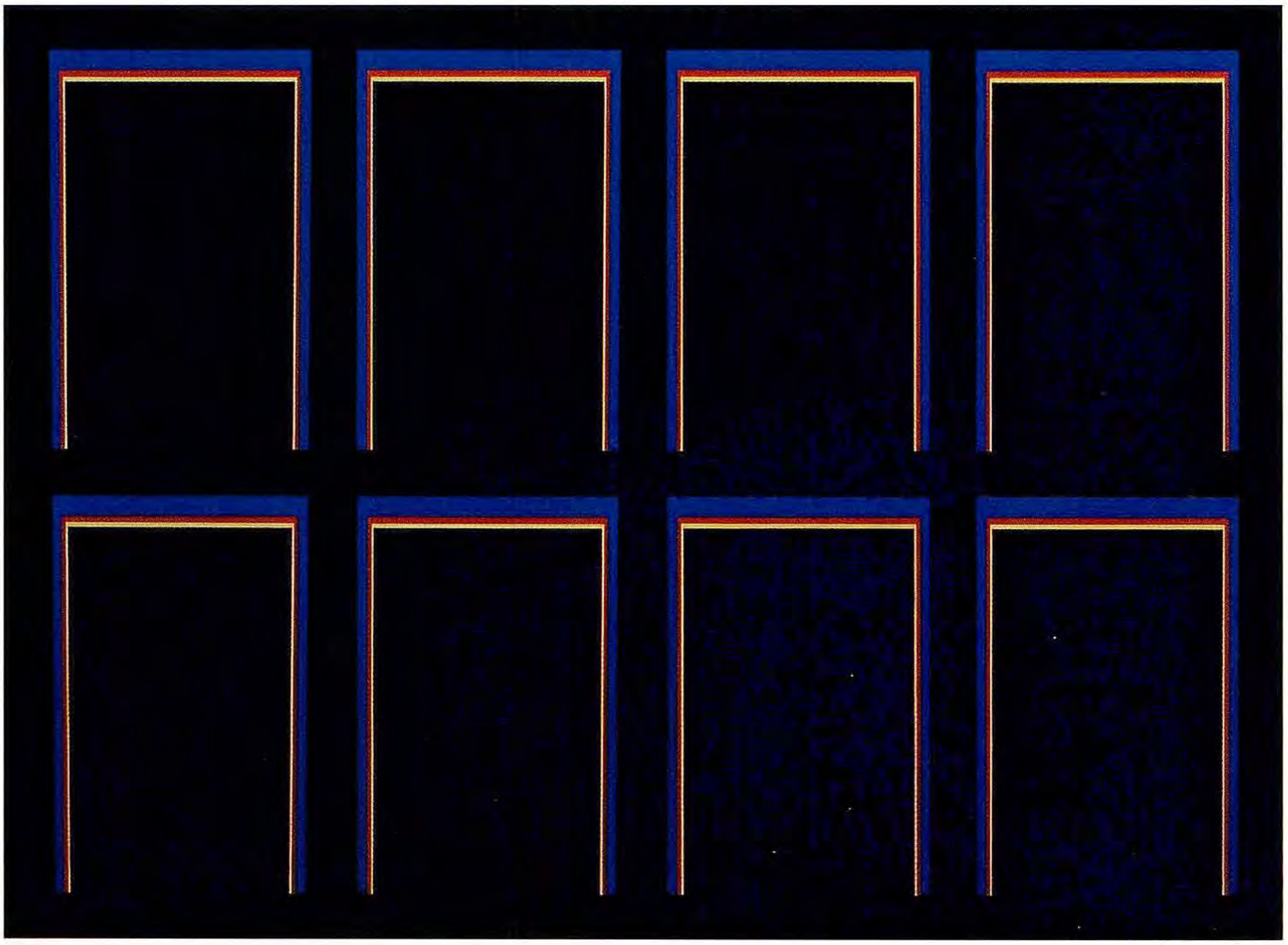
夕日を見ながら、あることを思い出した。「明けない夜はない。」という文句に対して

論理的に批判した文章だ。それによると論理的には、陽が昇るという経験を何回繰り返そうと必ずしもまた陽が昇るとは言い切れない、というものだった。屁理屈にも聞こえそうだが、この文章を読んだとき自分の立っている地平が揺らいだような気がした。しかし、なおも夜は明け続けるだろう。もうすぐ夜が明けそうだ。河川敷を歩きながらつゆっぽい空気を吸う。遠くには青白い空が雲の端からよじのぼってきそうだった。震えた。寒いからじゃない。彼を。彼を殺そうとする盲目の化物達が灰色の大豆畑で蠢き始めている。畑わるギラギラと光る箱に詰め込まれ運ばれていく。と妄想している。家に着くと震えは止まっていた。銀色に輝く街が美しい。

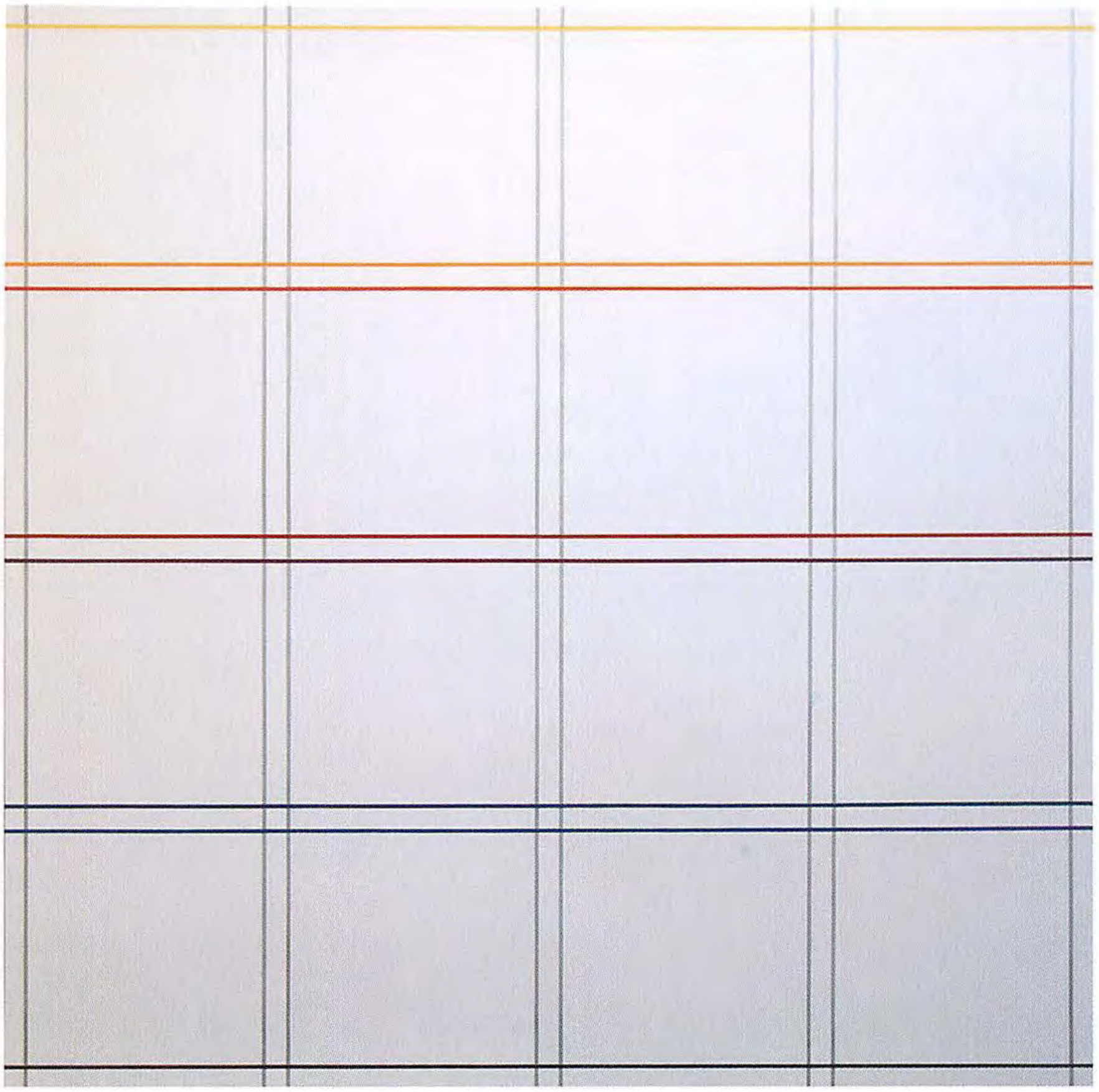
「僕が知りえることは何だろうか。」と問う。

「正しさとは何のためにあるのだろう。正しさとは何だろう。それが知りえることだとしたら、僕は何をすべきなのだろうか。」

なおも答えはないと知る。それだけが、知りえることのひとつだ。



They are blind in one eye.
木枠、綿布、アクリル
182.0×251.0cm
2011年



Frame of panel series
パネル、アクリル
162.0×162.0㎝
2009年



古畑智気

1986年　長野県生まれ
2009年　愛知県立芸術大学油画専攻卒業
2011年　愛知県立芸術大学大学院美術研究科博士前期課程修了

グループ展他
2010年　CIRCLE 2　愛知県立芸術大学サテライトギャラリー／愛知
都市の断片（あいちトリエンナーレパラレルイベント）　URBAN RESEARCH Gallery／愛知
菅隆紀×古畑智気展　喫茶木曜日ギャラリー／愛知
party　Gallery hinten／愛知
2009年　WORM HOLE episode11　magical ARTROOM／東京
CIRCLE　愛知県芸大教員住居／愛知
2008年　青春まっさかりだぜ　市民ギャラリー矢田／愛知
September　市民ギャラリー矢田／愛知
2007年　ながくてアートフェスティバル　長久手町／愛知
アートイベント"se bo ne"　豊橋市／愛知('06)

松川朋奈

MATSUKAWA Tomona

制作、around girlsシリーズによせて

彼女は仕事に出る時、友人や恋人と会う時、お気に入りの服を着て、きっちりと化粧をする。

もちろん、彼らは彼女の着飾った姿しか知らないし、すっぴんも見たことがない。

彼らは、彼女の部屋に、脱ぎ捨てたキャミソールが転がっていることを知らない。彼女のピンヒールが、で歪に擦り切れていることも知らない。

彼女の身の回りのものには、彼らが知らない彼女自身の姿が刻み込まれている。

人は誰かと接する時、自らを良く見せようとして、着飾ったり、猫をかぶったりすることができる。しかし、無意識の癖や、無防備に気の抜けた部屋の様子などは、簡単に隠したり、変えたりできるものではない。つまり、彼女自身よりも、彼女の身の回りのもののほうが、より鮮明に彼女のことを語るのである。

彼女の身の回りのものを拾い上げ、キャンバスにそれを描きだす。そうすることで炙り出されてくる彼女の本質をとらえることが、私の制作である。

私が、大人でもなく子供でもない年齢の時に、このテーマを追った制作は始まった。そのため、自分にとっても一番身近である大人でもなく子供でもない年齢の彼女たちを描き続けてきたが、これからは私自身の成長とともにモチーフの中の彼女たちも成長していくだろう。20代の私が描く彼女たち、今生きている今の年齢の私にしか見て感じることができない彼女たちの姿を、これからも追い続けたい。現代を生きる女性たちの本当の姿、言い表すことのできない淋しさや不安を内側に隠したまま人に見せることができず隠し続けてきた彼女たちの姿を作品を通じて感じることで、人に見せることができず隠し会話してもらえれば、自分自身の本質とも向き合ってもらえれば、と思う。



The Bond Snapped 3
キャンバス、油彩
112.0×145.5㎝
2011年



絆がとぎれる
キャンバス、油彩
116.7×90.9㎝
2009年



松川朋奈

1987年　愛知県生まれ
2011年　多摩美術大学絵画学科油画専攻卒業

個展
2011年　YUKA contemporary／東京

グループ展他
2011年　シェル美術賞展2011　代官山ヒルサイドフォーラム／東京
　　第35回東京五美術大学連合卒業・修了制作展　国立新美術館／東京
2010年　ANGELICA 01　YUKA contemporary／東京
　　とよた美術展2010　豊田市美術館／愛知
　　No Man's Land　フランス大使館別館／東京
　　第3回アーティクル賞入選者展　佐藤美術館／東京
　　第28回上野の森美術館大賞展　上野の森美術館／東京
2009年　アミューズアートジャム2009　京都文化博物館／京都

宮崎雄樹

MIYAZAKI Yuki

自分の立ち位置

日常の自分を取り巻く情景を作品のモチーフとして制作しています。

以前は長時間の電車通勤で、電車内の情景をモチーフにしていましたが、今は環境が変わり、車内にいる時間が少なくなったので、訪れた場所、出会った情景が中心です。元々人間観察・状況観察が好きでよくしますす。風のにおい、物音、老若男女の存在、携帯電話や音楽プレーヤーなど様々な情報が五感を伝って感じとっていきます。しかし、その状況に身を置きしばらくすると、自分がその空気に馴染めてないかと思い、一歩引いてみてしまうことがあります。それと同時に、自分の存在価値や自分の立っている位置を考えてしまいます。

少し前、昔大学の先生に作品を観て頂いた時に、距離感、正面性がある、もっと意識してみたらと言われたのを思い出しました。その頃の作品は人体を描いていて、今の作風と違いましたが、共通する所があったと思います。その言葉を大事にして、画面に変化を与えるべく、表現の方法の一つとして蜜蝋を使い始めました。湯煎をし、描いた画面いっぱいに流し込むと乳白色の膜が包み込み、絵の具とは違う何とも言えない独特な表情を見せてくれます。そして、その上に描くと微妙な距離感が生まれます。また、触感やあのソリッドな感じも興味深いです。

作品として提示した情景は、私しか見ていませんが、鑑賞者が作品を観て、以前どこかで感じた記憶とのリンク・共有、または私が想像もしない感覚を与えられたらと思っています。

情景と自分との距離感を確かめる…それは自分という存在の確認作業かもしれません。

人やものを取り巻く空間に存在するものは、何らかの形で必ず周囲に影響を与え続けていると思います。空間にすべてが在る可能性、自分と人やものの距離に有る可能性、それを常に感じていたいです。



池袋イーストゲートパフォーマンス
キャンバス、アクリル、蜜蝋、油彩
130.3×162.0cm
2011年



In done room-train
キャンバス、油彩
130.3×162.0㎝
2009年



宮崎雄樹

1982年　大阪府生まれ
2005年　大阪芸術大学芸術学部美術学科卒業

個展
2011年　トーキョーワンダーウォール都庁2011　東京都庁／東京
2010年　信濃橋画廊／大阪
2009年　ギャラリーメゾンダール／大阪
2008年　信濃橋画廊／大阪
2007年　信濃橋画廊／大阪

グループ展他
2011年　トーキョーワンダーウォール公募2011入選作品展　東京都現代美術館／東京（'09 、'08）
大阪芸術大学美術学科作家展　ギャラリーkazahana／京都
2010年　EXPOSITION "Nouveau 2010"　ギャラリーメゾンダール／大阪
一日だけの展覧会「ハガキ」　信濃橋画廊／大阪
こきり展　ギャラリー閑／三重（'08 ～'02）
2009年　第77回独立展　国立新美術館／東京（'08 ）、東京都美術館／東京（'07 ～'05）
2008年　thing matter time 2008　信濃橋画廊／大阪
API2008展「国際交易における芸術企画」　三重県総合文化センター／三重
第7回西脇市サムホール大賞展　西脇市岡之山美術館／兵庫
第60回三重県展　三重県総合文化センター／三重（'07 ～'03）
2007年　京展2007　京都市美術館／京都

本村　誠

MOTOMURA Makoto

絵画をめぐって｜絵具・画布・フレーム

窮地に立たされたら「自分らしく」ではなく、常に「思慮深く」ありながらもウソをことごとく見破り粉砕して人工的に振る舞うというよりは、生き物そのままの、記録性に執着することなく時に公然とフィクションとして誕生から生成へ熟成されながらもやがて消滅するというような記述は可能だろうか。

○

たとえば作品の印象が要約不可能としか言いようがないということが見受けられたとしても、むしろそれが作品の面白いところで観者が作品に向き合い留まっている間にこそ要約できない充実した経験があると思われてならない。さらに言えばそういった経験にこそはじめて言葉を費やすに値するものとなるのであって、ここで「言葉にできないもの」とあっさりそれらを神秘化し、結果作品に自己像を見てしまうようなことが作品の経験に繋がることにはならない。その経験を観照論として敢えて落とし込んで言うならば、つまりそうとしか言えない。

○

絵画においては画家の〈描く力〉そのものとその推進力でクリエイションしていく、その可能性を推し進めたもので、たとえば一本の線を引く、それを強めるためにまたとツッコまれそうだけれどそういった経験は当然自明なことではなく、毎度作品に個々の方法で向き合わないと得られるものではない。それもコンセプトとして組み込まれているということではなく、芸術がすでにそれらを内包しているということ。

「でもそういった理屈が面倒で難しいんだよ。」

と留まることなく自身でそう了解し、結論付けて済んだことにしてしまってはその面白さからどんどん離れていってしまうことになる。繰り返すがこのような経験は名指しできるものではないし所有できるものでもない、ましてや作品の印象を精緻にラベリングしながらＩＴ（データベース）化することが作品の経験に繋がることにはならない。その経験を観照論として敢えて落とし込んで言うならば、つまりそうとしか言えない。

○

「じゃあ何を見ろというの？だって作品における経験って本来そういうものじゃん。」

線を引くというような運動のことで、事前に何か設計図のようなものを作りそれに忠実に作られた結果そのものではなく、もっとコントロールできずに都度作品から誘導されたものの総体であるような状態を指向し制作していく、といったことが重要だと考えます。

また一方でそういった造形の成り立ちからは遠く、配置されたひとつひとつの要素またその背景を一見衝突してしまうのではないのか？というようなものを主従関係のない中にあってもいずれも等価値としてそこにあるような、または関係性もなく放り出されたかのような状態。眺めていて何か具合が悪くなりそうだというところまで視覚上グチャグチャにしてしまえという明らかな異化やノイズとなってしまう組み合わせを積極的に画面に採用するのです。なぜならば修練からどうしても習慣づけられた見方、自己流に依ってしまうことをそれらを洗練することと同義として捉えるなら、たとえば小説家・中上健次は新人についていまでも十分風雪に耐え得る言葉を残しています。「洗練は新人にとって敵である」と。

意外に思われるかもしれませんがそのようなギリギリの試みからは結果可笑しみのようなものが発生します…嘲笑かもしれませんが。〈笑い〉は〈生きる〉ということへの肯定主義に他ならないので、こういってよければそこに確かに〈生きる〉ことへの肯定感が醸し出す発見を見受けることが出来るのです。



左：**風景・場 05**
48.8×39.8×7.5㎝
右奥：**風景・場 09**
87.5×75.6×5.5㎝
キャンバス [油地]、油彩、
金箔を施した木製フレーム
2009年（展示風景）



左：**素描・構成07**
36.8×44.4㎝
中央：**素描・植物、リズム02**
右：**素描・植物、リズム01**
各26.2×32.3㎝
紙、透明水彩、アクリル
2011年（展示風景）



本村　誠

1976年　鹿児島県生まれ
2001年　東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒業

個展
2012年　絵画をめぐって｜絵具・画布・フレーム（仮題）　ギャラリー・スペース23℃／東京（等々力）にて
10月26日～11月18日迄開催予定
2011年　ドキュメント　ギャラリー・スペース23℃／東京
2010年　風景　ギャラリー・スペース23℃／東京

グループ展
2012年　Art Wave exhibition vol.1 創造のイノベーション　レクトヴァーソギャラリー／東京
1998～2001年　池谷元伸、小野智海、二階堂誠とのグループ　black.station.project.(以下b.s.p.)による活動
1999年　作曲家・伊東乾氏とb.s.p.による実験イヴェント　NTT厚木研究開発センタ内無響室／神奈川
b.s.p.による実験展　SEKILALA 366 the origin of the world　東京藝術大学・学生会館／東京
1998年　b.s.p.による実験展　暗闇におけるプロジェクト　東京藝術大学・学生会館／東京
1997年　606 1/2　東京藝術大学・絵画棟内／東京
すてきなタイミング　鎌倉五鐘洞ギャラリー／神奈川

The Scholar Perspective 20

アクリラート別冊2012

発行日　2012年7月1日発行
定　価　1,000円（本体953円）
発行所　ホルベイン工業株式会社
　　東京都豊島区東池袋2-18-4
発行人　吉村信夫
編　集　倉田妙子

holbein